

Lib.

京都産業大学図書館報

v.36,増刊号 (Dec.16,2009)

発表！！ 第5回京都産業大学図書館 書評大賞

入賞者一覧 2

選考経過と全体講評 3

<大賞> 4-5

<優秀賞> 6-15

<佳作> 16-35

アンケート・総計・概要 36-40

受賞者発表

第5回京都産業大学図書館書評大賞には77名78篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り受賞者が決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順



大賞

氏名（所属）		書評対象図書
ふるや 古屋	あやか 綾香 (文化学部国際文化学科 4年次生)	『きみの友だち』



優秀賞

たかき 高木	えり 絵理 (外国語学部中国語学科 4年次生)	『ぼくの小鳥ちゃん』
たぶち 田淵	まさひさ 雅久 (経営学部経営学科 2年次生)	『福祉を変える経営』
とりごえ 鳥越	しょうご 尚吾 (外国語学部英米語学科 3年次生)	『砂の女』
にしやま 西山	あかり あかり (経営学部経営学科 2年次生)	『夜回り先生と夜眠れない子ども』
まつもと 松本	たいち 太一 (経営学部 1年次生)	『点と線；時間の習俗；影の車』



佳作

あけお 明尾	やすこ 安子 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『夜のピクニック』
おがわ 小川	こういち 光一 (法学部法律学科 1年次生)	『ライ麦畑でつかまえて』
すみおか 住岡	たかひさ 賢尚 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『アーミッシュ』
とだ 戸田	しづか 志津香 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『だから、あなたも生きぬいて』
ながさわ 長澤	もとみち 求道 (経営学部ソーシャル・マネジメント学科 3年次生)	『最新約コピーバイブル』
はちけん 八軒	らいと 来人 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『優駿』
ふなびき 船引	れいこ 礼子 (文化学部国際文化学科 4年次生)	『羞恥心はどこへ消えた？』
まえだ 前田	はじめ 元 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『オーデュボンの祈り』
まちだ 町田	かな 佳奈 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『「少年A」この子を生んで……』
わきむら 脇村	まみ 真未 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『西の魔女が死んだ』

選考経過と全体講評

図書館長 小林 一彦 こばやし かずひこ

図書館書評大賞とは、本学図書館が所蔵する図書から1点を選んで、1,600字～2,000字以内の書評を書き、Webで応募するというものです。第5回となった今年は、1年生から4年生まで、78編の力作が寄せられました。

応募総数は前回の179編から減少しましたが、今回から電子受付に変更され、締切日の24時(午前0時)を過ぎると、有無を言わず応募できない自動システムとなった影響があったかもしれません。従来は、職員委員が翌日に出勤して、書評大賞への投稿メールをチェックした時点(つまり厳密には締切翌日の早朝)までの応募作が、選考の対象とされてきました。また、昨年まで応募数を底上げしていた授業課題としての応募、たとえば特定の図書(課題図書)への書評が10点、20点と大量に寄せられる、という現象もなくなりました。学生諸君の自発的な応募が、この厳選された数字となったと選考委員会では分析しています。

選考は図書館長、教員委員5名、職員委員5名の計11名で構成される、図書館書評大賞選考委員会によって行われました。第1回委員会は4月15日(水)に開催、募集要項や情宣活動、選考過程等々が審議され、決定されました。また、6月3日(水)には、芥川賞作家、平野啓一郎氏の講演会を開催しました。新型インフルエンザによる全学休校の時期で、開催が危ぶまれましたが、当日は図書館ホールも満席に近い盛況ぶりでした。

締切日の9月30日(水)、第2回選考委員会において、応募作品をほぼ5等分し、教員委員と職員委員の2名一組が、相談せずに各自で精読し、採点結果を持ち寄りそれぞれの評価をつき合わせて、2次選考へと進む作品を精選することが確認されました。選考作業は、毎年、応募作品に受付番号のみを付し、最後まで本人に関わるすべての情報を伏せたままで行われます。

そして2次選考には31編が進みました。11名の全委員が全31編をあらためて熟読、日本語表現・文体・構成・読解力・展開の仕方・独自の視点・論理的整合性・的確な意見かどうか等々、細部にわたって精査、点数を付けました。こうして各委員から提出された評点を合計し、点数の高い順に一覧リストが作成され、11月11日(水)の第3回選考委員会では、このリストをもとに、上位16編が入選作としてふさわしいかどうか、またこれ以外にも見落としや漏れがないか、慎重に討議が繰り返されました。このような厳正な選考を経て、リストの通り、大賞以下の受賞作が決定されるに至ったのです。

今年の特徴としては、まず書評の体裁をなしていない、完成度の低い作品が激減したことがあげられます。募集要項で引用と盗用の違いを詳しく解説したことも奏功してか、剽窃や盗用も皆無に近い状態でした。総じて応募作品のレベルは高く、例年なら当然入選していたであろう作品が、何編か涙を飲みました。まさに少数激戦でした。

書評は単なる感想文ではありません。書物の価値を客観的に評価するという強い意志が必要です。作品の内部に深く没入する一方で、作品を離れ冷静な立場から批判する、二つの態度が求められることとなります。入賞作品は、文章の破綻も少なく、構成もしっかりしていました。受賞者諸君には、心よりおめでとくと申し上げます。

末筆になりましたが、講義や研究活動でお忙しい中、長期間にわたり選考に従事してくださいました、渡邊先生(法務研究科)・中井先生(経営)・森先生(文化)・勝矢先生(理)・黒坂先生(工)、天笠・池田・近江・中上・真部の図書館職員委員、また協賛いただいた丸善(株)・(株)紀伊國屋書店・(株)キャリアパワー・(株)雄松堂書店京都の各位に、心より御礼申し上げます。



大賞

 古屋 綾香
ふる や あや か


書名：『きみの友だち』

著者：重松清

出版社・出版年：新潮社，2008

「きみの友だち、私の友だち。」

私には、ずっと謝りたい人がいた。そしてずっとずっとそれを出来ずにいた。重松清著『きみの友だち』。この本にはあの日の私とあの子に少しだけ似ている二人がそこにいた。

事故で片足が不自由になってしまった無愛想な恵美ちゃん。腎臓が悪く、とろくて鈍い由香ちゃん。二人は「みんなぼっち」でいるより、「ふたりぼっち」でいることに決めた。

「みんなぼっち」という言葉に私はドキリとした。そう感じるのには私だけでないはずだ。

「みんな」の輪から外れて、一対一で向き合ってみると目の前の子の事がよくわかる。「みんな」の輪に戻ると、とたんに「みんな」の中の一人になって、個人が消えていく。隣に座って笑っていたはずなのに、その子がどの子だったかわからなくなる。みんな一緒、みんなで仲良く、みんな楽しく。でも、そんなことは無理だ。時々「みんな」からはじき出されてみるとよくわかる。みんなぼっちなんてひとりぼっちと変わらないことを。もっと寂しいことを。そうやって「みんな」の輪から離れて二人と向き合った時、恵美ちゃんと由香ちゃんは手をさしのべて笑顔を向けてくれる。

私とあの子もクラスでふたりぼっちだった。クラスメートの中には教室を出ると話しかけてくれる子や「友達」に戻ってくれる子もいた。でもあの教室に入った瞬間、彼らは「みんな」になって行ってしまふ。そんな中であの子はただ、私の傍にいてくれた。「みんな」はホッと安心して私達を見て、また「みんな」で仲良く楽しくおしゃべりを続ける。「みんな」とは友だちになりたくなかった。なれなかった。

「友達って何だろう、どこからが親友？」そう思ったことはないだろうか。教室で一緒にいれば友達。お弁当を一緒に食べれば友達。一緒にいること、が友達の第一条件だと私は思っていた。だから恵美ちゃんのいう「わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど」という言葉が始めは理解できなかった。今も完璧な答えは出ないけれど、一人でいるときにその子の事を思い出して笑顔になれたら、「友達」なのかもしれない。そう思った時、色んな「友達」の顔が浮かんできた。ああ、あの子達は「みんな」の輪から抜けて向き合ってくれたんだ。そう思うと本を持つ手に力が入った。そのページはもう、最終話に近づいていた。

「だから……『みんな』に付き合ってる暇なんてない」

腎臓の重い病気を抱えた由香といつか別れの日がやってくるのが恵美にはわかっていた。それまでにたくさんの思い出を作って、由香がいなくなっても思い出せるように、そうすれば、いつまでも友達でいることができるから。だから、みんなになんかかまわられない。そう言い切る恵美の格好よさに憧れすら感じてしまった。私もそう言い切れたら良かった。だから「みんな」なんかいない、と。でも実際の私は恵美とは違った。もっと二人の時間を大切に向き合えたんじゃないかな。あの子の優しさにつけ込んで甘

えてただけじゃなかったかな。あの子は傍にいてくれたのに、「みんな」をどこかで羨ましがっていたんじゃないかな。……だから「ごめんね」。その一言をずっと言いたかった。

物語のラストは、少し意外だったけれど、胸の奥にすんと落ちて、じんわり広がってくように優しい話だった。もう後半はずっとずっと泣いていたけれど、それは悲しい涙では決して無かった。図書館には神様がいるのかもしれない。偶然手に取った本だったけれど、必然にしか感じられなかった。神様の巡り合わせだと、信じてもいいと思った。それくらい素晴らしい本。褒めすぎ、と笑ってくれていい。それでも私はこの本との出会いに感謝しているから。一つおまけ話、この本には笑顔になれるおまじないが載っている。私は時々実践するけれど何回やっても 100%笑顔になれるのだ。優しいラストと笑顔になれるおまじないは読んだ人だけが知ることのできる特権にとっておくことにしよう。

最後のページを閉じて、涙をぬぐってから、私は長い長い手紙を書いた。もちろんあの子に宛てた手紙だ。色んな事を書いたけど、どうしても伝えたかったはずの「ごめんね」が書けなかった。

「そういうときは、ありがとう、でいいの」

ふいに恵美のお母さんの言葉が聞こえた気がした。そうだった。一番伝えたかったのは謝ることじゃない。それよりも私は「ありがとう」を言いたかったんだ。私の友達でいてくれてありがとう。傍で笑っていてくれて、本当にありがとう。

長い事探し続けている問題があるのなら、一度この本を読んで欲しい。優しい優しいお話。自分なりの答えを出すためのヒントが散りばめられてあるから。

数日後、少し癖のあるあの子の字で手紙が返ってきた。今度一緒にいる時には、この本のことを話してみよう。面と向かっていうのは照れくさいけれど、「ありがとう」も添えて。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 森 哲郎

大賞となった『きみの友だち』の書評は、選考委員のほぼ全員の審査合意のもと、その文章の構成、作品の理解、独自の視点など種々の面で、第二位以下に総計点でかなりの差をつけて最高得点を獲得した。そこには書評者の、この作品への深い共感と理解を呼び起こす、独自の経験と真摯な姿勢があるからであろう。

この作品『きみの友だち』は、小学生の、足の不自由な恵美ちゃんと病気がちの由香ちゃんの二人を中心に、二人をとりまく家族や友達の、様々な子供群像が思春期まで、いわばオムニバス形式で生き生きと描かれた短編連作の物語である。それゆえに「きみの友だち」の「きみ」は十個の短編の各々で異なっており、しかも語り出しにおいて「きみ」が誰なのかすぐには分かりにくいようにしてあるが、そのことで「友だち」群像がかえってリアルで奥行きのあるものになっている。読者もいつのまにか「きみ」の傍（そば）へ招かれるような「優しい」気持ちになるのであろう。

評者は、恵美ちゃんと由香ちゃんとの関係に絞って、クラスのグループからの「いじめ」で無視され孤立した「ふたりぼっち」を、「みんなぼっち」との対比で、深く掘り下げて「友達とは何か」を考察している。「寂しさ」を紛らわす「みんな」に解消しないで「ひとり」を守り抜く無愛想な恵美ちゃんの、『わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど』という言葉、評者は「一人であるときにその子のことを思い出して笑顔になれたら、『友達』なのかかもしれない」という素敵な見方で理解する。由香の死、また友への負い目、「ごめんね」から「ありがとう」への不思議な転換、など物語の世界への共感とともに、評者自身の現実の友人への関係が重ねられて、作品理解の奥行きが深いものになっていると思われる。作品への「優しい」思いがあふれている優れた書評である。

受賞者から一言



図書館書評大賞は大学生活最後のささやかな挑戦でした。ありのままに、この本を好きだ！ という気持ちだけで書いたものなので、人に見せるのは恥ずかしい文章なのですが、今回このような形で評価して頂けたこと、大変嬉しく思っております。私は今回がラストチャレンジでしたが、本が少しでも好きな人には是非この催しに参加してもらい、良い本を広めていって欲しいと思います。



高木 絵理



書名：『ぼくの小鳥ちゃん』

著者：江国香織

出版社・出版年：新潮社，2001

「わたしの、そしてあなたの正しさ」

物語は、冬のある日、「ぼく」の部屋に「小鳥ちゃん」がやってくる場面から始まる。
玄関からこんにちは？

いいえ、当然窓ガラスにぶつかって不時着。

かわいらしいすずめがピチュピチュ、パタパタ？

いいえ、真っ白のからだにピンクのくちばしと足、生意気な小鳥ちゃんは開口一番、「いゃんなっちゃう。中途半端な窓のあけ方」。

ここで男の子の読者ならどう思うのだろう。文句の多い女みたいだって思うのかな？ 女の子は、友達になりたくないタイプだわって思うのかな？ 私は当然こう思った。「素敵！ 自分にとっての正しさを知ってるんだ！」。自分にとっての正しさを知っている人は、自分を責めたりしない。後悔など、しない。彼女は正しさを知っている。

本書の著者、江国香織さんは、「正しさ」を知っている人。「自分にとっての正しさを持つ」とは、自分の体に正直であることであり、世間などでは正しくないと言われていても、あたり前のようにそれらを蹴散らし、ひとつひとつの自分の答えを信じ、考えぬき、自分自身で証明していくことだと思う。彼女の作品の多くには、「正しさを知っている人」が登場する。『きらきらひかる』や『神様のボート』など、作品は多数あるが、映画化された『冷静と情熱の間』や『間宮兄弟』なら馴染みのある人も多いかもしれない。

数ある作品の中で、私があなたに『ぼくの小鳥ちゃん』を紹介したい理由は、この本が、あなたに「あなた自身」をみせてくれるから。そして、頭で考えるより先に、体が「自分」や「らしさ」や「幸福」を感じてしまえる本だから。まるで音楽を聴くように。難しくなかない。一緒に波に、揺られればいい。昨日の後悔や、明日の憂鬱など、とりあえず置いといて。

ある日やってきた小鳥ちゃんと「ぼく」は一緒に暮らしはじめる。彼らの日常は、私たちと似たようなものである。「ぼく」にはガールフレンドがいるし、仕事もある。たまに映画を観たりスケートに行ったり。ガールフレンドとキスもするしケンカもする。物語は淡々と進み、特別なことなどないけれど、しいて言うならそこには小鳥ちゃんがいる、彼女はとても個性的で素敵だということ。しかし特別なことなどないからこそ、「小さくて繊細な、痛みや幸福の気づき」を与えてくれるところは、本書のとても魅力的な点である。

突然やってきた小鳥ちゃんに「お水をちょうだい」と言われると、彼はミネラルウォーターを出そうとする。しかしそこでぴしゃりと小鳥ちゃん、「水道水でけっこうよ、あたしはそのへんのひよわな小鳥とはちがうんだから」。このセリフには圧倒されると同時に、彼女の正しさを感じることができる。まず初対面にもかかわらず、敬語を使わないところに気の強い彼女らしさを感じられる。そしてミネラルウォーターを出そうとする彼にも、不

器用で融通のきかない彼らしさを感じられるし、ここを読んだあなたの心の動きに、おそらくあなたらしさを感じられるだろう。「けっこうよ」というところには女性らしさを感じるし、あとに続くセリフには、彼女が「自分」というものをしっかりと持ち、主体的に生きていることが感じられる。周りがどうであれ、「自分は自分」で正しいということへの信念が、この言葉からバシバシと伝わってくる。

「ぼく」とガールフレンドの会話も、彼らの人間性や関係や空気やリズムを伝えてくれる。

デートの途中、車内でガールフレンドを怒らせてしまい、気まずい雰囲気になってしまった場面で、「こういうとき、あなたの小鳥ちゃんなら窓からとんでいっちゃうんでしょね」とガールフレンドは言い、「羽があるとすごく便利ね」とつけたす。このセリフは皮肉たっぷり、まさに「感服」という表現がぴったり。小鳥ちゃんに対するヤキモチやあなたといたってつまらないという、たっぷりすぎるくらいの皮肉だ。このセリフで、女性の賢さやいやらしさ、冷たさや芯の強さを垣間見ることができるだろう。

またこれに対する「ぼく」の気持ちも傑作である。彼はこう思った。「同感だった。ぼくこそとんでいってしまいたかった」。なんて鈍感で幸せなやつなんだ、男とは。

この場面で、男と女が永遠に平行線であるということが理解できるし、それでも互いに相手を求めてしまうだけの愛おしさも感じられるだろう。

本書の魅力的な点は、登場人物のそれぞれの「らしさ」が、最後まで決して色褪せないという点と、「自分の選択」というものを、あたり前のように肯定している点だ。彼らには「らしさ」があるし、それを信じることに躊躇などしないし、迷ったりもしない。私たちはみな、自由で自分らしくありたいと願うけれど、どこかで人の目や世間などを気にしてしまう。しかし自分にとっての正しさを知っていれば、私たちだって小鳥ちゃんになれるはず。「私は私よ」「僕は僕だよ」と、それは決して「自分勝手」などではなく、「正しさ」を軸にして生きていけるはずだ。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 勝矢 淳雄

自分にとっての「正しさ」を知り、それを持って生きていくことを筆者は視点、論点の中心に定めて、要所を抑え、批評し、これが題目、冒頭、末尾と一貫している。これはレポートを書く上にも重要である。文章は書き始めから軽妙で、この作品に合った随筆風の筆致で、筆者の独特の感性と豊富な語彙が散りばめられ、巧みな展開である。自分の「正しさ」を「自分らしさ」と結びつけて、「自分勝手」ではない、「自分の選択」で生きていくところに「正しさ」があるとす。筆者が作品から読み取った考えを述べ、書評としてうまくまとまっている。

今後の発展の手引きとして次のことを望む。①題目と本文の「あなた」を設定した意図は何か、また、誰のことか。この言葉は使い難く、意味も複雑である。筆者以外の者として、一般化した表現を考えるとよい。②体言止め、連用止めを使い過ぎると、軽く流れて、嫌味な感じを与える。もう少し減らして引き締めること。③「小鳥ちゃん」を「彼女」と表すと、客観的、第三者的に突き放す。これは「ぼく」の態度に反する。「ぼく」も「彼」では個性が消える。代名詞で表さないのがよい。④冒頭の六行は一段落、最後の段落の上の四段落は二段落ずつにすべきである。意味を考えずに改行し過ぎると、構成がゆるむ。⑤本作品に童話風のイラストがある。もちろん、文章が中心であるが、作風に合っているので、一言、触れてもよい。

受賞者から一言



「書くこと」しかないとわかっていたので、書くことがこわかったです。けど、「書くこと」しかないとわかっていたから、書かないこともこわかったです。どちらも同じなのだ気づいたとき、一歩進める自由を選べた自分が誇らしいです。そしてそんな自分を生んでくれた、過去の全ての人やモノや空気や事件や恋や食べ物たちが誇らしいです。ここから。



た ぶ ち ま さ ひ さ
田 渕 雅 久



書 名 : 『福祉を変える経営 :
障害者の月給一万円からの脱出』

著 者 : 小倉昌男

出版社・出版年 : 日経 BP 社 , 2003

「『福祉を変える経営:障害者の月給一万円からの脱出』を読んで」

「私は障害を持って生まれたことを不幸とは思わないが、日本の国に生まれたことを不幸だと思う」本書は、ある障がい者が言ったといわれる、このような言葉から始まる。近年ではワーキングプアやニート、ホームレス等の問題もとりざたされているとはいえ、世界でも屈指の豊かさを誇り、ものが溢れ、食べる物にも住む場所にも困るということがほとんどない日本に生まれて、何が不幸なのだと思う人も多いのではないだろうか。実際、私も日本に生まれて不幸だと思ったことはないし、むしろ日本に生まれてよかったと思っているくらいだ。しかし、障がい者問題に目をむけてみると、政府による「箱もの行政」の横行、昔ほどではないにしろ障がい者の方々に対する偏見、差別といったものが根強く残っていたり、本書のサブタイトルにもなっているように、1カ月フルに働いても月給で1万円程度しか貰えないのが現状だ。私達にとっては住みやすい国であっても、障害を持つ人にとって日本は住み難い国なのだ。

本書はクロネコヤマトの宅急便でおなじみの、ヤマト運輸の前社長であり、宅急便の基礎を築いた人物である小倉昌男氏が、福祉施設で働く施設長、職員などを対象に行った「経営パワーアップセミナー」の講義、レジュメを文章化したものである。今まで福祉という場では、お金を儲けるという考えがなかった。みんなで集まり、軽作業を通じて心のケア、自立心を育むということが目的であるという考えが一般的であったからだ。しかし、そのような考えが、結果として障がい者の方の月給が1万円しかないという状況を招き、障がい者の自立ということの妨げになっていたのだ。市場経済の中で到底売れるとは思えないお手玉や廃油を使った石鹸作りなどをして自立には繋がるはずもない。そこで小倉氏は、ヤマト福祉財団の理事長に就任した際、障がい者の「自立」とはどういうことか?を考え、それを、「働いて、収入を得て、生活すること」と定義づけた。そして、小倉氏はセミナーを開くところから始まり、福祉現場の現状を調査や、現場の人と対話など通しながら、実際に経営の知識を生かし、「スワンベーカーリー」というパン屋を出店し、障がい者の方が健常者と対等に働きながらも、高売上を保ち、見事月給10万円以上を得られるようなビジネスモデルを作り上げることに成功するのだ。

今まで長い期間をもって構築された常識というものを打ち破るには、相当な勇気や覚悟が必要である。ここでは、福祉とは一見まったく反対にも思えるお金を儲けるということに取り組むことによって成功した。小倉氏、福祉施設の職員、障がい者の方自身もはじめ

は本当にうまくいくのか不安であったことだろう。しかし、諦めて何もしなければ状況は悪くなるばかりだ。時には私達をも含め常識から脱却することが重要な意味を持つ場面があるのではないだろうか。

小倉氏は見事に障がい者でも健常者に近い収入を得ることができるということの可能性を示した。だが、本書が出版されてから約6年がたった現在、このようなモデルを参考にし、健常者に近い収入をあげる障がい者の方が増えてきているかといえば、私はあまりそのようには思わない。実際、少し調べてみても障がい者を健常者とほぼ同じような条件で雇用しているといった企業は、多少は増えてきているとはいえ、広く普及しているとは言えない状況であった。このようなモデルには出資者が必要であり、福祉についてもっと理解のある企業が出てくるか、国による支援が得られるような制度ができるのを望むばかりだ。

本書は、経済や経営、福祉についての用語も多く出てくるのだが、講義をもとにできていることもあり、終始こちらに話しかけてくれているかのような優しい語り口調で書かれている。書かれているものごとを順をおって丁寧に説明しており、まるで、こちらが理解できているかどうかを確認してくれている。そのため、経済や経営、福祉について何も分からないという人でもスムーズに読み進めることができるはずだ。この本を読んで少し福祉のことについて、日常の中で常識を破る視点を持つことの重要性について考えてみませんか。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 中井 透

ただ単に理解するだけでなく、実感することで物事の本質がより深く見えてくると言われています。本書が扱う障害者福祉の問題は、まさに、実感することでしか効果的な対応が見出せない重要なテーマのひとつであるといえるでしょう。

本書の著者である小倉昌男氏は「規制」撤廃の実行者であり優れた経営者として有名ですが、加えて「既成」概念の排除に挑み続けた稀有な経営者でもあります。経営は効率性を追求します。しかし、より深く、より多く実感することは、時として効率性を犠牲にしなければなりません。本書評では、小倉氏が「既成」概念から脱することで、効率性を犠牲にすることなく障害者問題と向き合った内容が巧くまとめられています。

対象図書を読んでみたくなるような書評とは、称賛の辞が繰り返されているようなものではなく、少々辛口でも的確な批評がなされているものだと思います。この点で、本書評は優れているといえるでしょう。しかし、それ以上に、本書評の最も優れている点は、書評者自らが障害者の収入について実態把握に努めることで、著者の主張を検証しようと試みていることだといえます。書評者は、障害者福祉について実感することで、当該問題の本質を知り、深い洞察力で本書を評することができます。それが、選考委員の高い評価につながったのではないかと思います。

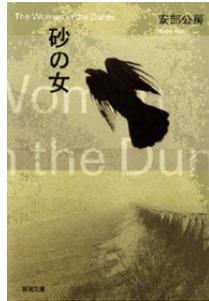
受賞者から一言



まさか自分の作品が優秀賞を受賞するとは思いませんでした。普段何気なく読んでいた本でも、自分で書評として文字におこしてみると、いつもとはまた違ったその本のよい所なども見えてきました。この受賞を励みに、読書を楽しみながら、次回の書評大賞にもぜひ応募したいです！



鳥越 尚吾
とりごえ しょうご



書名：『砂の女』

著者：安部公房

出版社・出版年：新潮社，2003

「本当の“幸せ”とは」

人生とは何のためにあるのだろうか。自分は一体、何のために生まれてきたのだろうか。思春期に、このような疑問を抱いた人は、決して少なくないはずだ。いや、思春期でなくとも、ある意味では我々が生きている限り、生涯に渡って考え続けていかねばならない、極めて壮大なテーマであるように思う。ご多分に漏れず私もこの疑問を感じ、足りぬ頭で悩みに悩んだ結果、私個人としては、この問いに対する一応の結論を出すことが出来た。「生まれたことそのものに意味は無い。意味は自分自身で見出すものである」。世間的にまだまだ若輩者の私がこのようなことを言うのは正直恐縮だが、私にしては悪くない結論だと自負している。しかし、この作品を読み終えた今となると、再びこの疑問に立ち戻らざるを得ない。「人生とは、一体何のためにあるのだろうか」、と。

主人公の中学教師が、昆虫採集のために砂丘の漁村を訪れる。彼は新種昆虫を発見し、自分の名前を学名として残すことを目的としていた。彼はこの村に一泊することを勧められるが、それは住民の罠であった。この村は砂丘の底を掘り続けなければ、自然と村全体が砂に飲み込まれてしまうという、極めて特殊な立地条件であり、その砂を掘る労働力として、主人公は一人の未亡人が住む地下の家に閉じ込められ、毎日砂と闘い続ける日々を送ることを強られる。もちろん、彼はそのような理不尽な状況を素直に受け入れるはずもなく、何とか村からの逃亡を図る、という物語である。

この作品を語る上で、まず触れなければならないのは、やはり文章表現の巧みさであろう。作中で幾度か、主人公の口に砂が入ってしまうシーンがあるが、読んでいるこちらにも、その不快感が伝わってくるようで、喉の渴きを感じるほどだ。口に砂が入ったときのあの不快感は、恐らく万人の知るところであろう。

また、序盤、村の実態が明らかになるが、もちろんこれは架空の物語であり、このような地域は実在しない。この書評を読んでいる方の中にも、少々村の設定が突飛過ぎると感じた方も少なくないと思う。かく言う私も、その一人だ。しかし、そこまでわかっているながら、本作を読んでいると、恐怖の感情を禁じえない。奇抜と思える設定にも、何故かリアリティを感じてしまう。それも正しく、作者の文章表現の豊かさの成せる業に他ならない。

そろそろ内容にも触れていきたい。この作品で最も興味深いのは、何と言っても物語の最後、主人公の選択である。彼の選択の動機は何だったのだろうか。

毎日砂を掘り起こさねば、家は砂に埋まり、また集落全体も砂に埋まる。それを防ぐために、毎日砂を掻き出す作業に追われる。聞けば聞くほど理不尽で無為なものを感じる。だが、男は決して奴隷のように働かされているわけでもなく、食事も保障され、酒や煙草といった嗜好品の類までもが手に入る。そして、そこには「女」もいる。人の欲求を満たすのに、不自由なわけではないのだ。更に、考えてみれば、我々の日々の生活にも同じことは言える。出来るならのんびりと暮らしたい、趣味に没頭して生きていきたいが、働かなければ食べていけない、家族を養うことが出来ない。だから働かざるを得ない。主人公は「自由」を求めて集落からの逃亡を試みていたが、逃亡に成功したところで、そこに「自由」など無いのである。そう、我々が送る日々の生活も、地下の家で砂を掘り続ける生活も、本質的には大差が無いのだ。これが作者から読者に送られたメッセージなのではないだろうか。

もちろん、これは日常生活の一面であって、砂を掘る日々と全く同じ、という意味ではない。自分の仕事に誇りを持ち、仕事に生きる価値を見出している人も、家族と過ごす日常が本当に幸せだ、と感じている人も決して少なくないはずだ。しかし、主人公はそういった日常を強引に奪われ、砂と闘いながら自己と向き合うことで、元の生活の中には、自分の幸せや、必ず取り戻すべき大切なものが無い、もしくは少ないと感じ、砂の中の生活に生きる価値を見出した。この主人公のように、気付かぬ内にただ同じことを繰り返す、無為な日常を送ってしまっている人も、少なからずいるのではないだろうか。

自分は日常で、本当に幸せを感じているのだろうか。自分の人生は、終わらない砂との闘いに過ぎないのではないだろうか。本書を手に取り、是非一度、自分に問いかけてみて欲しい。その際、喉の渇きを癒す水の用意も忘れずに。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 中井 透

本書は砂穴の底に埋もれていく一軒家から脱出を試みようとする男を通して、男の人生がいかに儂く虚しいものかを表現しています。そして読者に対して、自身の生き方を見直してみてもどうかと投げ掛けていると見ることもできるでしょう。

書評者は、著者が読者に投げたボールを、その鋭い感性でしっかり受け止めて、高い表現力を駆使して書評を行っており、全体的に優れたものに仕上がっています。

書評全体の文章構成も秀逸です。まず「人生とは何のためにあるのだろう」と問いかけ、読む者を本書のテーマに引きずり込みます。その上で、簡潔に本書を要約し論評がなされます。そして「そろそろ内容にも触れていきたい」として主人公の心の動きを表現することで本書の内容を紹介し、最後に自己流の分析を行っています。小説の書評で、このような文章展開がなされるのは稀なケースではないかと思いますが、それだけに、これを成し得た書評者の高い表現力が窺えるものになっていると感じました。

書評では、自分の人生を終わらない砂との闘いに過ぎないのではないかと問いかけてみて欲しいと締めくくっていますが、他人のことはさておき、書評者は自分自身に問いかけてみたのでしょうか。自身と照らし合わせてみることでまとめを述べれば、論旨明快なれども無味乾燥な感も否めない文章が、少しは人間味溢れる軟らかいものになったような気がします。

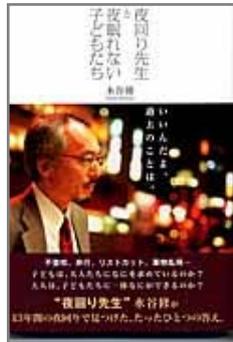
受賞者から一言



「文章を書く」という自分の趣味が、受賞という結果として表れたことを、素直に嬉しく思います。このことを今後の自信、誇りとすると同時に、驕ることなく、これからも精進していきたいと思えます。



にしやま
西山 あかり



書名：『夜回り先生と
夜眠れない子どもたち』

著者：水谷修

出版社・出版年：サンクチュアリ・パブリッシング、
2004

「夜回り先生と夜眠れない子どもたち」

「夜回り先生」、この本は水谷修さんがそのように呼ばれてきた中で出会った子どもたちの話や、子どもたちへの言葉がたくさんつまっている。

水谷修さんは夜間高校の教員になって以来、夜の街にいる子どもたちを1人でも多く昼の世界へ帰そうと「夜回り」と呼ばれる深夜パトロールを行っている。夜11時頃からパトロールして夜の街にいる子どもたちに声をかけ、相談にのっている。そんな彼を夜の子どもたちは「夜回り先生」と呼ぶ。

大人たちや世間は夜の街で悪さをしたり、麻薬で遊んだり、体を売ったりしている子どもたちを「不良」と呼び、家に引きこもったり、リストカット、OD(処方薬の過剰摂取など)を繰り返している子どもたちを「病んでいる」と言い、彼らを見向きもせず、あるいは恐れ、忌み嫌う。しかし夜回り先生は子どもたちがただ遊びたくて夜の街にいるのではなく、居場所を求めてそこにいることを知っている。彼らは大人の都合で傷つけられ、病まされ、追いつめられているのだ。夜回り先生はそんな彼らに愛を与え、人を信じてみようという切っ掛けを与えるために毎晩夜の街をパトロールし、子どもたちからの助けを求める相談のメールや手紙、電話を受け取る。

この本には夜回り先生が出会ってきた、苦しんでいる子どもたちにどのように愛を与え、希望を与えてきたか、夜回り先生と夜眠れない子どもたちとの話を通して、今、苦しんでいる子どもたちへ彼らが求めている言葉、求めている愛が綴られ、大人たちに子どもが求めているもの、子どもが必要としている愛を伝えている。

「水谷と一緒に、いろんな明日を作っていきますか。」「ずっとそばにいます。」夜回り先生のそんな一言がどれだけの子どもたちを救ってきたのだろうか。20歳になって、この言葉がどれほど温かく、どれほど勇気を与えてくれる言葉かというのが、初めてこの本を手にした16歳の時よりもリアルに感じられる。本を通してこれほど素直に心に入ってくる夜回り先生の言葉は、本を読んだ多くの子どもたちにも涙を流させ、希望を与えるだろう。

当時、私は「死にたい」「助けて」と夜回り先生に助けを求める「子どもたち」の視点でこの本を読んでいた。夜回り先生の言葉に切なくなり、親からの虐待や麻薬、売春の怖さを知り、その中で生きている自分と同じくらいの年齢の子たちの苦しみに言葉を失い、夜回り先生という人の存在にはげまされた。20歳という年齢になり大人へと向かいつつある今、「子どもたち」の視点だけでなく「大人」の視点にも立ってこの本を読んでいる自分がいた。今、親の子どもへの虐待やイジメを見て見ぬふりする教師、子どもへの性的犯罪な

ど多くの問題が頻繁に起こっている。事件としては解決したとしても、その被害者である子どもたちが「不良」や「病んでいる子ども」になってしまう切っ掛けは全て大人たちによって作られている。それなのに、「不良」や「病んでいる子ども」を非難し、ほっておく大人や、自分の子が勝手に腐っていったとでもいうように我が子を見放す親もいる。もしいつか私にも子どもができたなら、愛をいっぱい注いであげられるような人間になりたい、子どもの寂しさや辛さに気づいてあげられる人間になりたいとこの本を手にとって感じた。16歳の時には感じなかったが、この本は子どもたちだけに向けられたものでなく親や社会の大人にも向けられた本なのだということが今はわかる。

最近では、大学生や芸能人の麻薬の使用が大きな問題となっている。成長するにつれ、麻薬が身近にあり、手に届くところに潜んでいることがわかるようになってきた。知らない内に耳に入ってきたり、目にするような人もいるだろう。でも、そんな世の中を作ってしまったのは大人たちであり、その大人たちですら麻薬に手を伸ばしてしまう。その行動がさらに麻薬を広め、何も知らない子どもたちへと近づけてしまっていることに気付いているのだろうか。

私が初めてこの本を手にとって4年。高校生の私はこの本を読んで、自分の悩みや不満がとてもちっぽけに思えたことを覚えている。自分の環境がとて幸せで温かなものだとことを実感した時でもあった。20歳になった今、もう一度この本を手にとって16歳だった自分とはまた違った思いを感じることができる。

子どもから大人のすべての年代の人がこの本に心動かされるだろう。子どもたちは夜回り先生に愛や希望、信じる心をもらい、大人たちは子どものために何が必要か、どのように愛の言葉をかけてあげればよいか、何から守るのが大人の役目なのか、それぞれの「今」に必要な「今」だからこそ感じることができる思いがこの本から伝わるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 渡邊 泰彦

現実の残酷さは、えてしてハッピーエンドに導きたがる人間の想像を超えていく。その現実を本というワンクッションを通して知ることで、ようやく冷静にみるができるかもしれない。あまりにも自分と隔絶した現実、フィクションのようにみえるかもしれない。それでも、自分では経験できない現実を、どのように感じるのか。したり顔で知らぬ人に憐れみをかけるのか、それとも別世界の出来事と突き放すのか。要約に留まらない書評からは、書いている人の感情がこぼれ出る。書評を書く学生がきれいにまとめようとしながらも、その裂け目からこぼれ出てくるものを評価したい。

この書評では、もう一度手に取った本との関係で、自分の成長を見せてくれているところに好感もった。本との出会いには時期があり、その印象によって、とらえるところも変わってくる。本人が述べるように、子どもの視点から、大人の視点への過渡期を表している。この書評を書いた、何年後に、社会に出た筆者が、もう一度この本を手にとって読んでみたら、どのような書評を書いてくれるのだろうか。大人に対する批判を、大人になったらどのように考えるのか、そんな期待をもたせてくれるところも、またよかった。

いつも繰り返して読んでいた愛読書ではないかもしれないが、もう一度同じ本を読んでみるときの、新鮮な感覚。本の読み方の一つだろう。

受賞者から一言



この度は、賞をいただけるとは思ってもいなかったので、とても嬉しく思います。ありがとうございます。自分の可能性に挑戦してみることの大切さを学びました。近頃は、本を読む時間も少なくなりつつありましたが、これを機会に読書を習慣づけていきたいと思えます。



まつもと たいいち
松本 太一



書名：『点と線；時間の習俗；影の車』

著者：松本清張

出版社・出版年：文藝春秋，1971

「『点と線』を読んで」

『点と線』は推理小説であり、本書における重要人物といたらやはり、安田辰郎という男である。安田は病的にずば抜けた賢さを持っていた。安田は二人の人間を殺害した。一人は安田がよく行っていた割烹料亭「小雪」で働くお時と、もう一人は汚職事件が進行している××省の課長補佐であった佐山憲一である。二人の死体は九州の香椎潟という海岸で発見された。死因は青酸カリによる中毒死であった。刑事達は死体発見当初、互いに愛し合っていた佐山とお時が共に心中した、つまり二人は情死したのだと判断した。しかし、それが安田のトリックの一つだった。安田は他にも、後から調査されることを充分考慮した上で、様々なトリックを作り、誰も壊すことのできない鋼鉄のように強力なアリバイを築くのである。そんな強敵に立ち向かうのが、福岡署に勤める鳥飼重太郎と、東京の警視庁に勤める三原紀一という二人の警察官である。二人は、佐山とお時の情死に疑問を持ち、そして安田に対しても疑いを持ち始める。本書の前半は鳥飼がメインとなってストーリーが進んでおり、後半は鳥飼の考えに心をひかれた三原がメインとなって、日本列島を舞台に様々な捜査に踏み出し、安田のアリバイ崩しに奮闘するのである。

以上が本書の簡単な紹介である。本書は昭和33年に発表され、ベストセラーとなり、新潮文庫では100万部以上も売り上げている。著者は松本清張で、今年で生誕100年を迎える。本書の他にも、『わるいやつら』『砂の器』など数多くの作品があり、テレビドラマ化されている作品も多い。私は本書を読み終えた時、やはりベストセラーになっただけあり、非常におもしろい小説だなあ、と素直に思った。本書がなぜこんなにおもしろくて、なぜ多くの人に読まれているのか、自分なりに分析してみた。分析の結果、三つの理由を発見した。

一つ目は、内容にとってもインパクトがあるのだ。インパクトについて具体的に説明していくと、本書では、「時刻」が『点と線』のキーポイントといってもいいほど、本文の至る所に出てくる。本書の始めでは、電車の時刻が捜査の焦点になっており、電車の時刻から船の時刻、そして飛行機の時刻、さらには乗り物の領域を越えて、電報が送られた時刻、という風に、「時刻」を軸にしてどんどんストーリーが進んでいくのだ。もし、時刻の他に、薬とかビデオカメラなど話の軸になるものが複数になると、内容がごちゃごちゃしてインパクトを失ってしまい、後からその作品を思い出そうとしても、あれって何のお話だったっけ？という風に忘れ去られてしまうという始末である。本書では、軸の対象となる物を

一つに絞り込むことでインパクトを生み出すことに成功しているのだ。インパクトがあるから、他の人に『点と線』を勧めたいという気持ちが生まれるのだ。

二つ目は、文章の歯切れがよくて、情景や登場人物の気持ちが鮮やかに伝わってくるのだ。特に安田のアリバイを崩せるか否かの重要な場面では、早く捜査に踏み切ることが望む三原の焦燥感や、捜査が失敗という結果になった時の三原の敗北感がひしひしと伝わってくる。文中に、「彼の前には、乗車前と列車中と都合十六時間の長い時間が意地悪く拒んでいた」とか「二つの筆跡は、三原を嘲笑するようにみごとに一致していた」という擬人法や比喩があり、そのような修辞法の巧みな使用によって一層、焦燥感や敗北感を引き立たせていたのでよかった。

三つ目は、本書がとても読みやすいのだ。いくらトリックの内容が深い推理小説を書いても、読んでいて読者が理解してくれなかったら意味がない。本書には、難解な語句があまり出てこない。それにより、読者が普通に読んで理解できる作品となっている。鳥飼が三原に宛てた手紙の場面では、鳥飼が年下の三原に大人らしい風格を見せようとしたためか、普段あまり目にしない言葉が多く見受けられるが、ストーリーを理解することの妨げにはなっていないので大丈夫である。むしろ鳥飼と三原の、年の差を意識した関係がうまく表現されていてよかった。

以上の三つが、本書を一級品の推理小説にしている理由だと私は考える。今回、『点と線』における松本清張の魅力に迫ることができて本当によかった。松本清張の作品をまだ読んでいない人はまず『点と線』を読むべきだと思う。きっと松本清張の他の作品にも興味を持つだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 渡邊 泰彦

推理小説の書評を書くのは難しい。推理小説の醍醐味はそのトリックにある。だが、トリックを明かすことは禁じ手である。単なる要約では、作品を伝えることはできない。トリックを明かさずに、その作品の特徴を紹介するには、それなりの技量・切り口が必要となる。この書評は、「本書がなぜこんなにおもしろくて、なぜ多くの人に読まれるのか」という視点から書かれている。評する相手は松本清張である。技術論はおこがましい。気構えて技量を重視して書けば、すぐに馬脚を現す。そのようなきらいもあるが、この書評は、自分が感じた視点を軸にすえて、本書を紹介している。推理小説の代表作ではなく、おもしろい小説という、自分なりの視点が前面に出ている。このような後半部分がこの書評を評価した点である。

恥ずかしながら、『点と線』をこの機会に読んでみた。時刻表トリックの代表作という世上の評価が先入観となっていた。トリックは今となれば素朴。評者のように、おもしろい小説として読んだ方が、はるかに楽しめる。難解な語句が出てこないという評価になぜか納得。難解さを問う現在の小説に対する、意図せざる批判なのか。直球勝負のエンターテインメント作品であることを再確認した。

受賞者から一言



入賞できて嬉しい気持ちでいっぱいです。自分の書評が皆様に伝わったことがすごく幸せです。書評を書くのは初めてだったからとても難しかったけど、本の内容を論理的に客観的に伝えることに挑戦できたから、自分にとってプラスになってよかったです。



佳作

明尾 安子



書名：『夜のピクニック』

著者：恩田陸

出版社・出版年：新潮社，2006

「『夜のピクニック』を読んで」

「みんなで、夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう。」この一節が私にとってこの本の中で一番印象的な言葉である。この本の中に登場する高校には修学旅行がない。その代わりに高校生活最後のイベントとして、朝の八時から翌朝八時まで夜を徹して八十キロを歩き通す歩行祭というものがある。歩行祭は前半が団体歩行といってクラス毎に歩き、後半は自由歩行で仲の良い者どうし歩きゴールを目指すというものだ。夜通し語りあう者、好きな相手に想いを告げる者などさまざまで、歩きつかれてボロボロになりながらも、そんな時でこそ、夜であるからこそ語れることがあり、顔も見えない真っ暗なところで話をするのが歩行祭なのだ。主人公の二人である西脇融と甲田貴子は異母兄弟で、融の父の浮気相手が貴子の母であるという複雑な組み合わせである。融の父は両家族を残して亡くなってしまいが、葬式の際に甲田親子は堂々と葬式に現れた。融はキャリアウーマンな母と聡明な雰囲気をもった貴子に対してむしろ被害者である自分たちの方がこそこそと隠れて生きている気がしてならなかった。残酷なことにも同じ高校、そして同じクラスになってしまった二人はそんなわだかまりの中、付き合っているのかと勘違いされるほどお互いを強く意識するのにもかかわらず、口を利いたことがなかった。そこで、貴子は高校最後の歩行祭で融と話をし、わだかまりを解消するという一つの賭けにでる。この作品は融と貴子両方の視線から交互に物語が進行する。周りにいる友人たちは、本当に貴子や融のことが好きなのだろうと思わせる魅力的で個性的な人々ばかりで、その友人たちが全力で友達のことを思いやり融と貴子のわだかまりをさまざまな形で助け解消させていく。

『夜のピクニック』には印象的な言葉がたくさん登場する。融の友達である忍の「雑音だって、おまえを作ってるんだよ。雑音はうるさいけど、やっぱ聞いておかなきゃなんない時だってあるんだよ。おまえにはノイズにしか聞こえないだろうけど、このノイズが聞こえるのって、今だけだから、あとからテープを巻き戻して聞こうと思った時にはもう聞こえない。」という言葉や、「なぜ振り返った時には一瞬なのだろう。あの歳月が、本当に同じ一分一秒毎に、全て連続していたなんて、どうして信じられるのだろうか。」という言葉など、これによって読者は自分の青春時代を思い出し、それとリンクさせながらこの本を読みすすめていこう。この作品の代名詞であるといっても過言ではない「青春」。本当に青春してた人なんかいるのかなという貴子の言葉があるが、こうやって中学・高校時

代にすごした喜怒哀楽の感情全て、その時間こそが青春なんだと感じさせる。また、この本のストーリー展開の背景は常に歩行祭で皆が歩いている場面であり、時間や場面が大きく変化しないため、時間が少しずつ経過する。そのため、この本を読みすすめていくうちに、読者である自分も一緒に歩行祭に参加して歩いている気持ちになってくるのである。この歩行祭というのはある実在する高校がモデルとなっているらしいが、ほとんどの高校にはこのような行事はないし友人と夜通し暗闇を歩きながら語るということもなかなかないだろう。こんな行事がもし自分の高校にもあったら……と読者は羨ましく思うだろう。「自分なら誰と歩くだろうか、何を話し、どんな景色を心に焼き付けたらだろうか。」と。そしてそんなさまざまな自分の青春時代の気持ちや思い出が頭の片隅から蘇ってくる。私は、「何歳まで鮮明にこの時代のことを思い出すことができるだろうか。」とよく考えるが、この本を読むことによって、もっと歳を取ってもまた自分の青春時代の感情を思い出すことができるように感じた。大人ということに疲れて、昔の感情を思い出したい時、青春時代の言葉に表現できない感情を思い出させてくれる一冊であると思う。

選考委員による講評

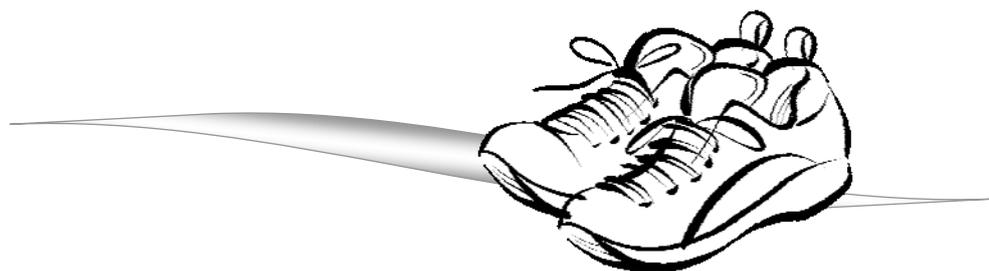
選考委員代表 文化学部教員 森 哲郎

『夜のピクニック』は、高校最後の「歩行祭」の一夜を舞台にした青春の物語であるが、評者も冒頭で指摘するように、「みんなで、夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろう」という「ただ歩くこと」への注目はまさに隠れた主題である。この指摘には講評者も新鮮な驚きを覚えた。物語は、主人公の二人、異母兄弟であることを互いに伏せている「融」（とおる）と「貴子」との隠された齟齬関係の行方をめぐる、好意的な友人達の深い配慮や友情などの青春群像であるが、お互いの話す言葉のレベルの高さに講評者は驚きながらも面白く読んだ。評者の見方、「読者である自分も一緒に歩行祭に参加して歩いている気持ちになって」、さらに「自分なら誰と歩き、何を話し、どんな景色を心に焼き付けるのだろうか」という問いを自ら問うことは、この「歩行祭」を、まさに今こうして生きているということに重ねて見ることであり、素敵な読み方だと思う。

受賞者から一言



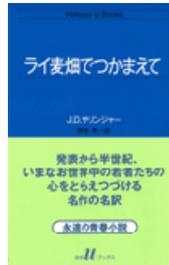
私は今まで読書感想文は書いたことがありましたが、書評を書くことははじめてでした。それを読んだ人がその本を読みたくなるように、その本の良さを伝えるための文章を書くことは、読書感想文とは違う難しさがありました。書評を書くことで一冊の本にじっくり向き合い、その本の良さも味わえる良い機会になったと思います。次回も挑戦できたら良いなと思いました。





佳作

小川 光一



書名：『ライ麦畑でつかまえて』

著者：J.D.サリンジャー

野崎孝 訳

出版社・出版年：白水社，1984

「ホールデン・コールフィールド」

ニューヨークのセントラルパーク西側地区。その場所はストロベリー・フィールズと呼ばれ、アスファルトの遊歩道には濃い青色と白色の石を埋め込んで作られた大きな円形状のモザイクがある。その中心には“IMAGINE”の文字があり、その文字を囲むように切り花がいくつも置かれている。ジョン・レノンの死を悼む碑である。そこから道路を渡った向こう側にフランス・ルネッサンス期の城館を思わせる壮麗なアパートメントが建っている。ダコタ・アパートといい、ジョン・レノンが生活して、死んだ場所である。1980年12月8日月曜日、彼を撃った男は『ライ麦畑でつかまえて』の本で銃を隠していた。犯人のマーク・チャップマンは5回発砲し、それから階段の縁に座って静かに本書を読み始めた。そして、本書の裏表紙にこう書いた。「ホールデン・コールフィールドからホールデン・コールフィールドへ」

これは一体どういう意味なのだろうか。なぜ、ジョン・レノンは殺されたのか。チャップマンを殺人的に魅惑し、ジョン・レノン暗殺を幫助した本書を読めばその答えが分かるかもしれない。どのページを開いてもホールデン・コールフィールドがそこにおいて、我々に親しげな口調で語りかけてくるのだから。「どこから話を始めたらいいか——僕がペンシー高校をやめた日のことから話すことにしよう。ペンシーってのは……」

物語の語り手であるホールデンは現在病院で静養中。病室のベッドから、静養することになった原因の去年のクリスマスに経験した「イカレタこと」を語ってくれる。話の中の彼は16歳だ。皆さんは16歳の自分を覚えているだろうか。

16歳といえばもう子供ではないしまだ大人でもない。そのぐらいの年になると年齢と共に精神的にも成長していて、この世界の仕組みがよく見えてくる。ホールデンが特にそうだ。そこには子供の幻想ではなく大人の現実があり、純潔ではなく清濁がある。例えば、相手の地位によって変わる態度や、上辺だけの薄っぺらな優しさなどがある。ホールデンはこれらを巧みに使いこなす大人や大人予備軍に対して異常ともいえるような嫌悪感を抱く。しかし、これとは対照的に純潔の象徴的存在である子供たちには全身的共感を示し、保護者としての責任感をも合わせ持っている。

本書のなかで僕の最も好きなシーンは、ホールデンが冷たい風の吹きぬける丘の上にポツンと立っている物語の始まりのところだ。フィールドでは全校生徒がフットボール・チ

ームを応援している。それを遠くに眺めながら、歴史の先生に退学の挨拶をしに行こうか考えているのだ。今回は3度目の退学になる。その日の夜、あることが原因で寮生と喧嘩し、それ以上学校に留まっていることが嫌になり、そのまま荷物をまとめて夜汽車に乗ってしまう。ニューヨークへ。しかし、そこには醜い現実と淡い夢が混在し、彼はの中で独り傷ついていく。そこには当たり前の現実が広がっているだけなのだが、ホールデンにとっては耐えられない現実なのだ。仮面をつけた大人たちから自分の中の大切なものを守ろうとするかのように、ホールデンも同じように仮面をつけて心を閉ざし、怯える。怯えながらも、しかし、誰にも自分を理解してもらえない孤独感や疎外感から誰かとの繋がりを求めて彷徨う。暗闇の中で飛翔虫が炎の方へと引き込まれるように。そして、鱗粉を撒き散らして炎の一部となってしまう。面白いことに、語り手である17歳のホールデンがそうかもしれない。月曜の午後に大雨が降ったところで物語の幕が閉じられ、この長い物語を語り終えたホールデンは、兄のD・Bに、話してきた事についてどう思っているのか訊かれる。ホールデンは、「実を言うと、どう思ってるのか、自分でもわかんないんだよ。」と、我々に告白する。それはきっと、現在の彼の考え方が物語の中の彼とは違って、戸惑っているからであろう。かつて、彼の心はビー玉のようにまっさらだった。しかし、そのビー玉に少しずつ傷がつき、七色の光を放ち出す。ビー玉から欠けたカケラは元に戻らないが、光背となって光り輝く。

本書は1951年にアメリカで出版された。出版されるや否や、各国に翻訳出版され世界中で大反響を呼んだ。出版当時、バッド・ワードが多いというような理由で本書は有害図書追放運動の矛先となったことがある。しかし、それから現在に至る約60年もの間相変わらず世界中で読み継がれてきた。なぜなら、ホールデンの本質的なものは国境や時代を越えてどんな人々にも共通し、彼の持つ苛立ちや傷つきやすさ、つまり、若さが長い年月を経てもなお色褪せること無く本書の中で生き生きと輝き続けているからだ。彼はこの世界に生きるには美しすぎる。そう思わずにはいられない。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 中井 透

『ライ麦畑でつかまえて』を読んで、物語の語り手であるホールデン・コールフィールドの感情がとても上手に描写できています。また、書評者がその感情に共感を覚えながらも、一方でホールデンの自由な生き方とそれを可能にしている若さを少々羨ましくさえ思っていることが伝わってきました。飾ることのない、ありのままの感性と素直な心が溢れ出ているような書評は共感を呼びますし、それゆえにこの書評が、選考委員からも評価されたのではないかと思います。

ただし、自ら設定した問題に十分答えきれていないのが残念です。殺人犯が本書の裏表紙に書いた文の意味、犯人を殺人に駆り立てた理由、などなど。本書が「ジョン・レノン暗殺を幫助した」のかどうかは別としても、全く無関係でない以上、その答えが本書を評することで分かるかもしれないと期待を持たされた身としては、少し消化不良でありました。

受賞者から一言



まず、お忙しい中選考していただいた京都産業大学の先生方と、このような機会を設けていただいた協賛社の方々に感謝したいです。ありがとうございました。

そもそも、友人とどちらが図書館大賞に選ばれるか勝負するために応募しました。夏休み中、一生懸命がんばって書評に取り組みました。しかし、そいつは応募していなかった……。ある意味僕の負けです。

でも、いろいろと勉強にもなったのでよかったです。あいうえお、文章の書き方、構成の仕方、表現の仕方。今回僕が参考にしたのは映画の表現でした。いろいろと疲れました。



佳作

 す み お か た か ひ さ
 住岡 賢尚

 書名：『アーミッシュ：
 もう一つのアメリカ』

著者：菅原千代志

出版社・出版年：丸善，1997

「『アーミッシュ:もう一つのアメリカ』を読んで」

あなたは、「アーミッシュ」と呼ばれる人たちをご存知だろうか。アメリカやカナダに住む、二十一世紀の現代において、生活の基盤を農業とし、移動を馬車で行うという、現代文明を拒み十九世紀のような暮らしをしているキリスト教の一派である。彼らの家にはテレビもラジオも電話もなく、電気やガスにおいても色々と制限している。彼らは、服装も独特でありシンプルである。青、茶、緑といった自然色に近い色を好み、男女共に黒い靴を履く。男性は、シャツは無地、ズボンは黒か濃紺でベルトは使わずサスペンダーでとめ、女性は髪を切らず後ろで束ね、白いキャップをかぶり、無地の長いワンピースを着ている。装飾品は身につけない。偶像崇拜を否定するため、個人の肖像画、写真を認めない。布教活動もしない。彼らはやさしく、穏やかであり、彼らの解釈に基づく聖書の教えを厳格に守る。家族の絆を大切にする彼らには離婚という概念もない。そして、絶対平和主義を貫き全ての争いを拒み、良い農業者となることを喜びとする人たちである。

本書は、一人のフリーカメラマンである著者とそんなアーミッシュたちとの交わりを書いた作品である。著者はカメラマンなだけに、本書には随所に著者の撮ったとされる写真が貼られていて、アーミッシュたちの生活の雰囲気を読者にも伝わりやすい。この写真のどかな風景を眺めているだけで、私は心が癒され、ゆったりとした気持ちになる。少し残念なのは、カラー写真のページが本書の冒頭の十数ページしかなく、随所にある写真は白黒であるということである。それでも、アーミッシュたちの生活を、視覚を通して知ることができるという点は大きい。

また、本書は、著者と複数のアーミッシュの家族たちとの親交描写だけを長々と書き連ねているわけではなく、随所にアーミッシュの人たちに関する説明が書かれているため、彼らがどのような人たちなのか、読むにつれて深く分かるようになっているのも、読者にはありがたい。もちろん、著者とアーミッシュたちとの親交のやりとりも、どこか心温まる。

十八～二十三歳で結婚する男女が最も多いというアーミッシュの家庭は、平均8人の子供がいるとだけあって、どこの家庭もたくさんの子供がいて楽しそうである。コーヒー・マグが好きなジョンおじいちゃんの書いた「孫たちへ」の詩は、読んでいて、とても優しい気持ちになった。また、アーミッシュの人たちは役割分担がはっきりしていて、料理、

洗濯、裁縫などの家事は女性の仕事なのであるが、彼女たちが作る料理はとてもおいしそうであったし、彼女たちが縫って作るキルトはとても味わい深いものであった。アーミッシュは質素な生活を送っているが、料理だけは贅沢なようである。ぜひ、食べてみたいものだと思った。

本書の終わりの方では、著者が「人間関係を損なうと考えられる現代文明を拒否」し、「自然と共存しながら暮らすアーミッシュの人々の生活は、私達が失ってしまった穏やかで豊かな人間性が感じられる。」と語っている。確かに、私たちが暮らす現代社会の中では、個人主義が叫ばれるが、次から次に溢れてくる情報に思いのままにもてあそばれ、モノで散乱し、競争の渦へ巻き込まれ、なかなか満たされることがない欲望にストレスが溜まり、不安で不安定になりやすく、それが様々な社会現象を巻き起こしていると思う。そんななかで、彼らアーミッシュの生き方というものが、現代を生きる我々に何か指し示してくれるものがあるだろう。最後に著者も語っている。「これから私達がアーミッシュのような生活に戻れるとは思わないが、彼らの生き方には、あくことのない消費文明を突き進む私達への、静かな警告が込められているように思えてならないのである。」と。

京都産業大学にはアーミッシュに関する本がいくつかあるが、本書はページ数もそう多くなく、文章量も比較的少ないので読みやすく、アーミッシュたちに関する説明や写真が随所にあるため理解しやすいと思う。アーミッシュ入門書としてもオススメできる一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 勝矢 淳雄

現代文明と関わりなく、キリスト教による同胞的な生活を送る人々を具体的にわかりやすく紹介し、我々の生き方に反省を促している。文章の上達のため改めるべき点を述べる。①題目の「……を読んで」は中学高校まで。自分は何を言いたいのか、その中心点を示すものにする。②生活の説明が多くて、それについて筆者がどう受け止め、考えたかが足りない。自身の思考・批評を重点にする。③本文の中心は終わりから二つ目の段落であるが、引用が半分である。これをもとにして、筆者の読後の感想から思想として深め、まとめて結びとする。この部分を膨らませ、充実させると、主題が明確になり、題目になる。④最後の段落は重複していて、第二段落に吸収させる。冒頭の「あなた」と一文は不要。全体の構成・展開が思考の過程を表す。⑤「思う」、「思った」の三回は使い過ぎで、レポートによく見られる。これを削っても「思う」ことになり、言い切るようにする。

受賞者から一言



文章を書くことはあまり得意ではなく、この書評も四苦八苦しながら書きました。このような名誉な賞をもらえたことは私の励みになりました。また機会があれば書評に挑戦してみようと思います。ありがとうございました。



佳作

戸田 志津香



書名：『だから、あなたも生きぬいて』

著者：大平光代

出版社・出版年：講談社，2000

「生きる」ということ

この本の帯には、こういう言葉が書いてあった。「涙もいっぱいであるけど、元気もたくさんです」と。私が最初にこれを見たとき、「お涙頂戴のドキュメンタリーか」と思ったのが正直なところである。しかし、まず目次を見て驚いた。そこには、いじめ・自殺・非行・司法書士試験・「ゴウカクオメデトウ」という単語が書かれていた。これらの言葉を一つに繋げようとしても、どうしたって繋がらない。だから、内容が気になってたまらなかった。

この本の著者である、大平光代さんは、中学の時にいじめを受け、それを苦に自殺を図る。そしてその後、仲間と呼べる存在を求めて非行に走る。自分の場所を見つけるために、暴力団とも関わりを持ち、わずか16歳で「極道の妻」となる。その世界で6年間過ごした後、ある一人の男性に出会い、更生し、猛勉強の末、日本一難関と言われる司法試験に合格し、現在も弁護士として活躍している。

この本の簡単なあらすじであるが、たったこれだけでも、著者の人生がいかに凄まじいものであったのかが分かる。私には、いじめられた経験もなければ、自分の友だちが自殺をはかるまで追い詰められている、なんて状況に遭遇したこともない。だから簡単に「いくらいじめられたからといって、死んだら負けだ」なんて言葉を口にすることが出来る。しかし、実際にそんな体験を味わった人にとって、いじめの辛さは言葉にできないほどの苦しみであるに違いない。その辛さに耐え切れず、いっそ死んでしまったほうがましだと考え、自殺を図る人の多さには驚くばかりだ。現在でも、いじめによる自殺者は後をたたない。そんな中で、著者はそれを「自分の心の弱さ」として、真摯に受け止め、乗り越えていった。自分が自殺未遂を犯したことによって、家族に対する周囲の目も変わったし、本人に対しても、さらにいじめがひどくなってしまったこともまた事実である。それにも関わらず、それらすべてが自分のせいだと自らを責め、どんなに辛くても、なぜあそこで耐えなかったのだろうと、自らを戒め、過去の過ちから更生しようと立ち上がった。著者はそれを、自分と向き合わずに逃げ出していた“弱さ”がすべて災いしたものだと言っているが、私にはそれが著者の“強さ”であるとは考えられない。「受け止めて、乗り越える」この言葉の重さが、私には分からない。簡単なことではないことぐらい、誰にだって想像できる。乗り越えられない人が数多くいるから、自殺者が無くならないのだろう。どれだけ自分と戦わなければならなかったのか。ひどいいじめによって、人を信じることが

できなくなってしまった著者が、生きぬこう、前に進もう、と歩み始めることができたのは、まぎれもなく著者の強さであると思う。

著者が更生できたのは、もちろん彼女一人の力ではない。彼女を理解し、背中を押してくれた人がいたから今の彼女がいるのだろう。「自分を理解してくれる人」の存在の大切さを、改めて考えさせられた。「人は一人では生きていけない」というフレーズは、よく耳にするものであるが、この本はそれを本当にその通りだと読者に伝えてくれる。「確かに、あんたが道を踏み外したのは、あんただけのせいやないと思う。親も周囲も悪かったやろう。でもな、いつまでも立ち直ろうとしないのは、あんたのせいやで、甘えるな！」(本文より)これは、著者がある男性に言われた言葉である。そしてこの言葉に、私は心を打たれた。自分を解ってくれる、自分を叱ってくれる、そんな存在がいることが、どれほど幸せなことか考えたことがなかったからだ。当たり前のように親に甘え、友だちとじゃれあい、生きている。これが当たり前になってしまっている。当たり前と思わずに、一日一日を大切に生きていきたい、生きていかななくてはならないのだ。こんなに辛い体験をしてもなお、必死に生きてきた人もいるのだから……そう思えた。人は人に支えられ、初めて強くなる。だから私も、自分を支えてくれる人々を全力で支えていきたい。この本は、今の自分は力いっぱい生きているのか、根底から考えさせてくれる本である。冒頭で述べたように、「涙もいっぱいであるけど、元気もたくさんである本」本当にその通りである。まだまだこれから人生は長いから、著者のような人のことを知っておいて損はないと思う。是非とも読んでもらいたい一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 黒坂 光

本書評は、全体的にまとまりがよく、読者に本の内容を的確に伝えることに成功している。文章表現も、若干のぎこちなさが残るが概ね適切である。書評者の感動が余すところなく記述されており、読者にして本書への関心をかき立てるに十分な効果がある。斯くいう私も書評の影響を受けて、本書を読んだ一人である。しかし、書評としては感情移入が少々過ぎていないだろうか。本書に対する思い入れが強すぎるため、本の評論というより、個人的な主観に基づく感想文とも見て取れる。一歩引いて冷静な目からの批評が欲しかった。客観性を持てば、自ずから批判的な視点も持てるはずである。

本書は、いじめ・非行・極道の妻・更正・司法試験合格という波乱の人生の体験記である。いわずと知れた当時のベストセラーではあるが、私が好んで読む本ではない。書評委員となる縁を得て本書を手にし、面白く読めたことは望外の喜びである。

受賞者から一言



佳作入賞、本当にうれしく思っています。まさか自分の作品が選ばれると思っていなかったのですごく驚きましたが、大変光栄に思っています。本から得られる知識はすごく自分のためになるので、今後もたくさんの本に触れ合っていけたらいいな、と思います。



佳作

^{なが さわ} ^{もと みち}
長澤 求道


書名：『最新約コピーバイブル』

著者：宣伝会議コピーライター養成講座 編
出版社・出版年：宣伝会議，2007

「書評『最新約コピーバイブル』」

まずこの本のタイトルとなっているコピーバイブルという言葉の説明をしようと思う。コピーとは単純に言えば広告上の言葉であり、バイブルとは聖書のことである。つまりこの本は広告制作における聖書なのであろう。厳かな装丁や章ごとの扉絵などの雰囲気もそのようになっている。

本書の内容は大きく分けて2部構成である。大部分を占めるのがコピーライターによるコラム集となっており、巻末の60ページほどが「古今コピー集」と銘打たれたキャッチコピー集という構成になっている。おそらくコラム集がいわゆる本編でありコピー集はおまけなのだろうが、このコピー集がおもしろい。古今というだけあって本当に時代を感じさせるコピーから、大学生の私でも知っているようなものが集められている。また内容もはっとするようなシリアスなもの『いのちとひきかえにやらなければならない仕事はない。』（藤田医院）」やくだらない駄洒落を用いたコピー『INTEGRA NOTTEGRA HONDA』（ホンダ）」。思わずニヤッとしてしまうような上手いことを言っているコピー『「明日からやろう」と40回言うと、夏休みは終わります。』（Z会）」が多い。それらのほぼ全てに共通して言えるのが、そのコピーの向こうの商品（商業広告だけではないのだが）が見えるということである。優秀なコピーばかりが集められているのだろうが、コピーのもつ力の凄さがよくわかる。

大部分を占めるコラム集もおもしろい。様々な広告に関するテーマに沿って、様々な広告マンあるいはウーマンによって書かれており、広告制作の依頼の受け方、広告制作の仕方から完成後の打ち上げの仕方、また実際に媒体にのった自分の作った広告を見る時の心境まで知ることができる。なかでも印象的だったのは基礎編の最初の「コピーライターをめざす、あなたへ」というテーマで書かれた、仲畑貴志のたった2行の「あなたがだれかになる必要はない。あなたはあなたのコピーを書いてください。」という文章である。クリエイティブという分野において月並みな言葉かもしれないが、以降に続くコラムにおいて、それぞれの筆者がまさに「あなたのコピー」といった文章を書いており、その言葉の正しさを証明している。ひとつのコラムがだいたい2～4ページとなっており、その2ページがすべて箇条書きで埋められたものや口語調で書かれたものなど文体だけでも様々である。また「私のコピー作法」というテーマで16個のコラムが書かれているが、それぞれがそれぞれの言葉で書かれているので飽きることもない。

コラムの内容は主に広告制作の手法、過程あるいは広告制作における言葉の使い方や気持のあり方に関するものというように多岐にわたる。中にはキャッチコピーなど必要ないという問題提起もある。重ねて書くが、多くの広告マンがそれぞれの文章を書いているが全く同じ事を書いている人はいない。これは上記の「あなたのコピー」をそれぞれが書いていることにも起因しているだろうが、一番の要因は「広告効果の曖昧さ」ではないかと思う。〇〇という広告を作れば絶対に売れる、というセオリーがないのである。著者たちが広告業界で生きてきたそれぞれの経験を書いており、中には中学生時代の思い出（もちろん広告に繋がるものだが）を書いている人もいる。つまり新約聖書がイエス・キリストの生涯を記したものならば、この最新約コピーバイブルは広告マンの生涯を後世に伝えるものなのだろう。

とても楽しみながら読むことができたが、気になったのはひとつひとつのコラムの短さとコピー集のコピーに対する情報の少なさである。文章を書くプロであるコピーライターによるコラムなので簡潔で読みやすく、なおかつおもしろいものになっている。しかし、おもしろさ故に物足りなさも感じる。コピー集は膨大な量が載せられているのはとても魅力的なのだが、コピーと広告主名のみなので、作られた年代などが書かれていればもっと良いものになっただろう。

キリスト教徒が必ず聖書を読むように、広告に携わる者は必ず読むべきだと思うほどに広告業界、製作者の事がよくわかる本だった。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 黒坂 光

よくまとまった書評である。多数のライターによる短いコラムからなる本書は、書評の対象としては難しい本であるが、本書評は本書の特徴を簡潔にかつ的確にまとめあげている。書評者が本書の特色を十分理解していることに加えて、その評論には独自の視点があり斬新である。また、他の書評にはほとんど見られない批判的な切り口も含まれており、面白く読むことができた。私の中では、高い評価を得た書評の一つであった。

対象図書はところが、私にとって大変な難物であった。本書は、コピーライターを目指す人にとっての基礎から実務に至るまで、実際に仕事に携わっている人達からの指南書である。コピーライターを目指すどころかそのセンスすらない私にとって、その道のプロが入れ替わり立ち替わり語る体験談を読むのは苦行そのものであった。ただし、これは私と本書との相性の問題であり、本書がコピーライターを目指す人や関心を持つ人にとっての必読書であり、バイブルと言える良書であることに疑念の余地はない。

本書の読後に書評を振り返り、書評の的確さを再認識した。取えて補足するならば、本は読者を選び、読者は本を選ぶのである。この点を強調して欲しかった。

受賞者から一言



今回このような賞をいただき一番感じた事は、思いもしなかった自分の価値を再発見できた事への喜びでした。小・中学校時代に読書感想文を出す事すらしなかった私ですが、人の才能(と言うのはおこがましいですが)は思わぬところに眠っているものだと感じました。この度は本当にありがとうございました。



佳作

はちけん らいと
八軒 来人



書名：『優駿』上下巻

著者：宮本輝

出版社・出版年：新潮社，1989

「『優駿』を読んで」

本書の一大テーマとは何か。競馬の魅力、いのちの尊さ、人生の冥利……私には一体それが何なのか最後まで解せなかった。しかし、この読後感たるや何なのか。本書ほど、小説世界へ飛び込みたいと思わせてくれた作品は無い。

とある北海道の小さな牧場、トカイファームで一頭のサラブレッドが産まれる。その牡馬の名はオラシオン。スペイン語で「祈り」の意味を持つオラシオンは、その周りで関わった人たちすべての運命を背負いながら、やがて日本ダービーを迎える。

トカイファームのオーナー、渡海千造の息子博正は祈った。「どうか、産まれてくる仔馬が風の精の申し子のように速く、嵐みたいに烈しく、名馬となる天命をたずさえた仔馬でありますように……。」博正のオラシオンに対する異様なまでの期待、愛情は終盤に行くにつれて読者へ圧倒的な感動を与え、彼の夢や希望の大きさはオラシオンの成長や結果と比例していく。そして彼は、オラシオンが日本ダービーで勝った暁にはこのトカイファームを日本一の牧場にするという決意をするのである。

後にそのオラシオンの馬主となる和具工業株式会社の社長、和具平八郎には一つの秘密がある。それは一人の隠し子が居ることであった。しかしそれは娘の久美子にも、親子同然の関係になりつつあった秘書の多田時夫にも、はたまたそれは自分の記憶からも忘れ去られようとしていた遠い昔の話であり、だから京子が平八郎の会社に訪ねてきたとき、彼は「やっぱり来やがったな」という気持ちになった。京子の体に平八郎の子供が宿ったと聞かされたのは15年前。そのとき彼には既に3歳になる久美子が居たし、平八郎も当然京子は子供を産すものと考えていた。しかし、京子はその平八郎との間にできた子供を産んだのである。

平八郎の息子、つまり娘の久美子にとっては腹違いの弟に当たる誠は重い病に苦しんでいた。病名は「慢性腎不全」。京子は改めて何らかの代償を得ようと平八郎のもとへ訪れたのではなかった。ただ、たったひとりの息子の母として、思い余ってその子の父にすがりついてきただけなのである。その子のたった一人の父の、健康な片方の腎臓を求めて…。平八郎はその事実を妻には話さず、久美子に話す。お前も見たことのない15になる男の子が居ること、その子は重症の腎不全で長いこと寝たきりであること、そして、その子を助ける最後の術が、父親の腎臓を移植すること……。そしてまた、ここでも平八郎が久美子に話すという決断の裏にはオラシオンが関わっている。ここでの一連の流れが本書は単な

る競馬の話ではないことを読者に意識づけ、それと同時にサラブレッドに手を出した人間特有の因果を表現しているのであろう。

久美子は後日、誠の病院へと向かう。誠は自分には父親は居ないと聞かされているため、久美子は「お母さんの知り合いです」と告げ、誠と話を交わす。彼はずっと久美子の存在を不審に思うのだが、彼女がオラシオンの話を始めた時、誠は久美子も驚くほどの目の輝きを放つ。久美子の口から、彼女も予期していなかった言葉が誠に小声で投げかけられた。

「オラシオンをあげる」。オラシオンの出走は早くても二年後で、誠にとってその「二年後」は、ひょっとしたら迎えることの出来ない年であるかもしれない。そんな少年になぜ、変な夢や希望を与えるのか。読者はここで一瞬久美子に疑いの目を持つが、それでも彼女は父から譲ってもらったオラシオンを誠にやろうとする。ひょっとするとオラシオンが誠を元気にしてくれるのではないか。オラシオンが誠にとって希望の存在となるのではないか。彼女はそう考えたのである。その後の多田との会話で見せる彼女の本心に、読者はお嬢様独特の振る舞いを見せ続けた久美子の隠れた優しさを知る。

若干、時間軸が捉えにくいもののオラシオンの誕生から日本ダービー出走までのわずか2年半という歳月を、それぞれの登場人物の視点から大きなうねりをあげて向かう終盤への流れは圧巻の一言。登場人物それぞれが個々に動いているようで、そうではない。会社の存続と顔すら知らない息子の命の狭間で苦悩し続ける男、不治の病と闘い続ける一人の少年の儂い命、小さな牧場で育った青年の大きな野望、友人を殺したと思いき死に物狂いでオラシオンに騎乗する騎手、それらすべての人物の陰にオラシオンが居る。さらには田舎者博正とお嬢様久美子の淡い恋にも読者は胸を踊らされつつ、一頭の駿馬による物語はクライマックスを迎える。

本書を読み終わったあと、私の脳裏には北海道の大草原で仔馬がいなく姿が頭から離れなかった。来春には私も、北海道へ生まれたての仔馬を見に家族で足を運ぼうか。宮本輝氏の小説には、読者を旅に赴かせる、そんな力がある。本書もまた、そうであったように。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 小林 一彦

ここ1・2年の傾向だが、ドラマの予告編のような書評が目立つ。テレビの影響だろうか。本作品も、その例で、『優駿』のあらすじを巧みにまとめながら、そこに時々、評者の感想が覗くスタイルである。長編をこれだけの字数でまとめるのは難しい。その点、評者はストーリーを手際よく語るすべを心得ており、能力の高さを感じさせる。「とある」「この読後感たるや」などの語調も、文章を引き締めて効果的だ。それだけに、最終段落のまとめかたには、失望させられた。「北海道への旅に赴かせる」のが、本書の意図なのか。冒頭の書き出し「本書の一大テーマとは……最後まで解せなかった」とも、対応が悪い。いったい、評者は長編小説『優駿』のどこに感動し、なぜ、他者にこの作品を薦めたいのか。的を絞って魅力を伝えることも、一法であったろう。そのあたりが、惜しまれてならない。評者には優秀賞・大賞も狙える力量がある。在籍学年が分からないが、もしチャンスが残されているなら、上記の点に注意しつつ、来年さらなる飛躍を期待し、応募を待ちたい。

受賞者から一言



今回このような素晴らしい賞を頂けたことは私にとって大きな誇りであり、何よりも将来阪神タイガースの番記者になることが目標の私にとって大きな自信となりました。今後も『文章で人に気持ちを伝える』という事を常日頃から意識し、将来の目標に向かって意義ある大学生活を送りたいと思います。この度は本当にありがとうございました。



佳作

ふ な び き れ い こ
船引 礼子



書名：『羞恥心はどこへ消えた?』

著者：菅原健介

出版社・出版年：光文社，2005

「ジベタリアンと羞恥心」

「恥の国、ニッポン」が崩壊していると私は危惧している。米国の文化人類学者、ルース・ベネディクトが日本を「恥の文化」と位置付けて以来、“人様に恥ずかしくないよう”行動することが日本人の美德だと考えられてきた。羞恥心とは喩えて言うと、私たちの心に取り付けられた警報装置である。世間の目を意識し、身内以外の人間がいる場合、何かみっともないことをすると“恥ずかしい”という感情で、私たちに知らせてくれる。

しかし、最近では車内で化粧をする女性は増え、駅や構内などの地べたに直接座り込むなんて日常茶飯事。一体彼らはなぜ恥ずかしくないのだろうか。羞恥心という警報装置がうまく作動していないのではないのだろうか。

駅や構内、学校などの地べたに座り込む若者は、「ジベタリアン」という名称で呼ばれている。彼らはまるで家の座敷に座るかのよう、駅や構内、学校などの地べたに尻をつくつろいでいる。周囲の多くの人たちが呆れたような顔で通り過ぎていても、人目を気にする素振りはない。そういった奇妙な行動を見て、彼らの羞恥心は麻痺していると、新聞やテレビなどのマスコミは批判している。

しかし、「最近の若者はどうなっているのか！」と非難するだけでは終わらないところが本書の魅力である。彼らは本当に羞恥心を失ってしまったのかという疑問を明確化していく。

彼らはなぜ駅や構内、学校などの地べたに座るのか。一つ目に考えられるのは、自己揭示欲だ。彼らは早く社会に認められたいと願うが、同時にどうしたら認められるのか分からない。そのため、公の場の地べたに座ることで注目されている感覚を味わっている。二つ目は、現実逃避である。大人社会に認められたくても認めてもらえない、それなら現実社会から目を背けたいと考え、現実的な空間から、地面に座ることで非現実的世界に閉じこもる。以上の二つの心理が働き、ジベタリアンが存在しているのではないかと著者は仮説を立てた。

しかし、ジベタリアン現象の背景に、以上に述べた複雑な心理はなく、単純素朴な結果だった。それは「楽だ」という感覚である。もちろん“座る”とは、休息したい時に行う人間共通の行動である。しかし、それは“自宅”の中の話である。ジベタリアンは、公共の場に他の人が存在しないかのように、まるで自宅でくつろいでいるかのように、地べたに座っているだけだった。つまり、ジベタリアンは、個々に特別な理由や動機があるわけ

ではない。公共場面に居合わせる他の人の目を全く気にしていないのだ。

では一体誰の目を意識しているのかと疑問が生まれる。ジベタリアンの心の構造を見ていくと、誰もが持っていた“他者からどのように見られているのか”を感知するセンサーが働いていないかのように思う。しかし、彼らの羞恥心は壊れてしまっている訳ではない。彼らには彼らなりの警報装置を持っているのだ。例えば車内で化粧をする高校生の例を挙げると、車内で化粧するのは恥ずかしくないが、彼氏の前で化粧するのは恥ずかしいと言う。自分の仲間からの評価は重要視するが、それ以外の人たちの視線は全く気にならないという感性があるのだ。

かつての伝統的な地域社会では、近隣の人たちとの人間関係が重要な意味を持っていた。そのネットワークから除外されることは、物理的な意味でも、心理的な意味でも大きな痛手となる。また、人間関係が密なだけに、お互いの生活の様子がよく見えてしまう。悪い評判が立たないよう世間の人々の目を気遣うという心性は、日本人の恥意識の大きな要であった。

しかし、今では他者との関係は希薄化し、隣人の素性も知らないことも少なくない。ジベタリアン現象や、車内化粧現象のような特異な社会行動は、日本人の恥意識の変化を象徴する一つの現象かもしれない。そういった意味で彼らの存在は、私たちの社会のあり方について重要な何かを問いかけている。本書は、ジベタリアンや車内化粧など、現代において軽視されている若者の行動を、「今時の若者論」から一歩踏み込み、私たちにとって“恥”とは何かを見つめなおす一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 工学部教員 黒坂 光

本のタイトルは最近の新書にありがちなキャッチーなコピーである。まず序章に 20 ページを使って、ジベタリアンを取り上げ、巧みに読者を本書に引き込む。そして、それからの 150 ページほどが本論である。タイトル、序章とはうって変わって、本論は著者の長年の研究の集大成と言うべき、羞恥心を通して見た文化人類学論である。ジベタリアンを象徴的にとらえて、狭い世間の常識がまかり通る現代社会の有り様が描かれている。

本書評はジベタリアンの特徴を詳しく記述しており、それ自体分かり良い。しかし、本書はジベタリアンの分析が目的ではない。書評の最終段落にある「重要な何か」、「私たちにとって“恥”とは何か」についてしっかりと書いて欲しかった。ジベタリアンの向こうにある文化について考えを巡らせることができれば、この書評はさらに高い評価を得たはずだ。

最後に文体についても触れておきたい。「しかし」から始まる段落が 4 回も繰り返されるとさすがに気になる。このあたりも一工夫欲しかった。

受賞者から一言



佳作に選出していただきありがとうございます。本書は、私自身一若者として、自分達がどのように見られているのか、また、自分達の行動がどのように発生してきたのかを考察できた興味深い書物だと考えています。



佳作

まえだ はじめ
前田 元



書名：『オーデュボンの祈り』

著者：伊坂幸太郎

出版社・出版年：新潮社，2003

「オーデュボンの祈り」

この本は、伊坂幸太郎のデビュー作で第五回新潮ミステリー倶楽部賞受賞作である。

舞台は仙台の牡鹿半島をずっと南に来たところにあるという「荻島」という名の架空の島だ。主人公の伊藤はコンビニ強盗をしてつかまり、パトカーから逃げ出した後この島に辿り着く。しかし辿り着いた島は150年ほど外との交流がない、いわゆる鎖国状態の島であった。この島に住む人々は奇妙な人ばかりである。たとえば島での人殺しを認められた男、桜。彼は彼の基準に従い悪いことをした人を拳銃で撃ち殺す。これはあくまで彼の基準であり、島民の中にはなぜ殺されたのかわからない人もいる。伊藤はそれについて島民に反論するが、島民から「彼は法律でありルールだ」という言葉を聞き、それについて島民が受け入れていることを知ると激しくカルチャーショックを受ける。また、反対のことしかしゃべらない画家の園山さん。彼は過去に辛い事件があり、それ以来反対のことしかしゃべらないようになってしまう。つまり、彼が『「YES」といえば「NO」であり、「NO」といえば「YES」』なのだ。そして極めつけは優午というしゃべるかかしである。しかも未来を見通すことができるという。

次の日、優午が殺される。無残にもばらばらにされ、頭はなにものかに持ち去られていた。だがそこで伊藤らはあることに気づく。もし本当に未来がわかるのならば、殺される前に誰かに守ってもらえばいい。なぜかかしは自分の死が予測できなかったのか。できていたとしたらなぜ誰にも言わなかったのか。

これがこの物語の中心となる謎である。この謎だけでも十分面白い。しかし、これ以外にもこの物語のいたるところに謎と伏線がある。たとえば島の伝説の言葉。荻島には百年以上前から伝わる伝説の言葉があり、それは『ここには大事なものが、はじめから、消えている。だからすべてがからっぽだ』というもので物語中何度か「その欠けているものは何か」という問いが繰り返される。そしてラストそれが何かわかった時に「ああ、これが伏線だったのか。これが答えだったのか」と物語の中でいくどもそのヒントや答えが出ていたことがわかる。そして、その後何度も読み返してしまう。

この本の主題は「すべてのものは関係している」ということだと私は思う。本書内は非常に多くの伏線があり、ほんの日常の些細なことが意外な結論につながっていたりする。未来がわかる優午はその伏線がどの結論につながっているかすべてわかってしまう存在だ。作中で伊藤は彼をミステリー小説の名探偵にたとえている。名探偵は謎を解き明かし犯人

を指摘するが、犯罪を未然に防げない。優午も未来を知ってはいるが未来自体を変えることはできない。

この本の題にもなっている「オーデュボン」というのは 19 世紀のフランス生まれのアメリカの動物学者で、今はもう絶滅したリョコウバトという鳩の絵を後世に残した。これは本書の中心の謎と関わってくる。

『この島がリョコウバトと同じ運命をたどるとすれば、私はオーデュボンのようにそれを見ているしかないでしょう』、『ただ、私は祈りますよ』という優午の台詞がある。未来への大きな流れがあり、たとえそれが悪い方に行っていたとしてもその流れを変えることはできない。様々な要因からこれから人類がリョコウバトのような運命を辿るとしても我々はただ祈るぐらいしかできない。本書はそんなことも感じさせる。

最後にしゃべるかかしなどと言うとさもファンタジックだが、なぜか本書内ではそれを感じさせない。台詞は軽快でとても読みやすく、少し皮肉があり面白い。ミステリー小説好きの人はもちろん、それ以外の人もきっと楽しく読めると思う。続きが気になる、ぜひ一気読みしてほしい一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 渡邊 泰彦

一つ間違えば、本の要約になりかねない。しかし、本人の感想が出ているところを評価した。複雑に構成された小説に対する、自分なりの興味を示している。本を評するという客観的な態度よりも、自分がおもしろいと思ったことを強調する。その書評を読んだ私が、同じくこの本を読んでみたくなるのか。この点が、私なりの審査の基準である。

文章全体は、リズムもあり読みやすかった。どのような部分に興味を持ったのかも、はっきりとわかる。小説の内容もだいたいつかむことができる。その意味では、よくまとまった書評である。作品と一定の距離をおいて、評している。反対に言えば、きれいにまとまりすぎているともいえる。作品との距離感を縮めたときに、自分がどのように考えるのか。作品と格闘する書評を書いてみれば、どのようになるのかと、期待させてくれた。

受賞者から一言



今回、まさか自分が入選するとは思ってなかったのでとても驚きました。とても光栄です。書評に選んだこの本は、とても面白くまた、好きな本です。この書評を読んで、この本を読んでもくれる人が増えたらうれしいです。





佳作

町田 佳奈



書名：『「少年A」この子を生んで……：
父と母悔恨の手記』

著者：「少年A」の父母

出版社・出版年：文芸春秋，2001

「「少年A」この子を生んで…」

この本は1997年兵庫県で起こった「神戸連続児童殺傷事件」の犯人である、当時14歳の少年Aの両親による悔恨の手記として出版されたものである。全6章で、各章それぞれに両親の悲痛な思いがつつられている。

まずはこの事件のいきさつからこの本は始まり、父の手記、母の手記へと進んでいく。おそらく事件のいきさつを知った時点では、この少年、その両親への何とも言いがたい、怒りがこみあげてくるだろう。少年が犯してしまったことはあまりにも残虐で、非人道的であった。しかし、次へ次へとページを進めていくと、両親の悲痛な思いがひしひしと伝わってくる。そして何よりも感じられるのが、少年への愛情の大きさである。本の内容で察することはできるが、少年が凶行へ至った原因のひとつに家庭環境が挙げられている。少年の家庭でのしつけはととても厳しく、彼は両親からの愛情を感じるができなかったのである。その先入観からか、まるで両親は少年に対して何の興味も示してはいないように思っていた。しかし、それは大きく違い、二人は必死で彼を愛し、「いい」人になってほしい思いが強すぎるがゆえのことであったのだ。そんな愛する息子の犯行、すべてを知ったときの両親の衝撃は想像を絶するものであろう。それでも二人はへこたれることなく事実を受け入れ、彼と向き合おうと努力を続けたのである。

二人の思いが綴られたあとに続くのは、逮捕後の少年Aの様子、また育ってきた過程である。親だからこそ感じえたこと、見えたものが少年の幼少時代、そして中学生時代へと順を追って綴られている。その中で少年の心が変化し、あの事件を引き起こす鍵となった出来事がいくつも挙げられている。なぜ、今思い返すことのできるような印象の強いことだったのかもかわらず、両親は見過ごしてきたのか。そこで気づけたとき、何か手を差し伸べてやっていたら、彼は犯罪者にならずに済んだのではないか。そんな感情を抱かざるをえないところがたくさんあった。しかしその出来事のうちのいくつかは、両親にはうまく見えないようになっていたのである。

少年が小学六年生のときに書いた作文に「僕にお母さんがいなければ」といった一文があった。しかし、当時の担任はその部分をカットしていたのである。それは少年Aの家族のためを思ってされたことであったが、そのために、彼らは少年のSOSのサインを見逃す結果になってしまったのだ。あまりにも偶然が重なり、良かれと欲してしたことが裏目

に出た、皮肉なものである。もし、自分が、この両親の立場ならば……そう考えるだけでもぞっとする、そこまですべてを二人は赤裸々にもこの本に書いたのである。

最後の締めの章は母によって、少年Aの逮捕後の精神鑑定書を読み終えたときのこと、そしてこれからのことが書かれている。逮捕直後の少年Aの様子から、更生施設での少年Aについてまで全てが書かれている。ここは少年がどのように日々の生活を送り、どのように変化しているのかがよくわかる。そして、もうひとつ感じられるのが、両親、母の強い意志である。おそらく一般家庭の母親ならば、自分の子供がこんな事件を起こしたと知った時点でもう何らかの病気を負うことだろう。しかし彼女は病気になるどころか、より強くなったように思える。これから少年を支え、そして、遺族の方に一生をかけて償っていかうという強い思い。その強い彼女の意志こそ、この本の出版につながったのだと思う。

この本を読み切ったとき、まず心に大きく残るのは少年の犯した罪の大きさ、そして遺族の悲しみであろう。この事件は多くの人を恐怖にさらし、悲しみに導いた。しかし、その少年にも、わたしたちと同じ両親、家族がいる。その家族の思い、愛情は他の家庭と何ら違うものではなかった。彼に向けられた両親の愛情の大きさは、むしろ、他の家庭よりも暖かく大きなものであった。そんな家族の思い、知ることによって、あの事件に対する思いや見方も大きく変わるのではないか、と思う。それは、私の考えが大きく変わったように。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 勝矢 淳雄

書き難い、重い内容の本を意欲的に取り上げ、この両親の悲しみと苦しみ、また、少年への愛情と今後への努力を重点的によく捉え、どのように受け止めたかを率直に述べている。しかし、思考と文体・文章の関係から注意すべき点がある。①題名は主題・内容を示したものにす。②結末で両親の愛情を他の家族より暖かく大きいと言うが、これはこの事件があったからこそこのことで、これだけでは結びとして弱い。人生や人間の生き方にまで広げる。③「もし自分がこの両親の立場ならば」、「一般家庭の母親ならば」、「私の……ように」など仮定や例示を使っている。これは余計なことで、思考を深めていない。この両親に即して考え、そこから普遍化してこそ批評になる。また、文体の注意として、①同じ言い回しや言い古された表現が目立つ。②「のである」、「のだ」の使い過ぎはレポートにもよく見られる。この使い方を辞書で調べるように。

受賞者から一言

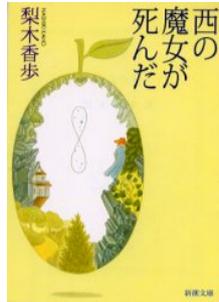


私は普段そこまで本を読む方ではありません。おまけに、文章を書くことも得意ではないので、この受賞を知ったときはまさか！ といった思いでした。しかしその反面、とても誇らしく、嬉しい気持ちになりました。これを機にたくさん本に触れ、そして文章を書くということにもっと慣れていきたいと思ひます。



佳作

脇村 真未



書名：『西の魔女が死んだ』

著者：梨木香歩

出版社・出版年：新潮社，2001

「『西の魔女が死んだ』を読んで」

『西の魔女が死んだ』は梨木香歩のベストセラー小説で、昨年映画化もされ、書店にも必ずと言っていいほど置いてあるので知っている人も多いかもしれない。登校拒否となってしまった中学生のまいが、田舎に住むおばあちゃんのもとで生活することで、まいの心が癒されていく様子を描いた物語である。田舎のおばあちゃんといっても、まいのおばあちゃんはイギリス生まれなので、家も生活も外国のものである。そこでまいはおばあちゃんから自分が魔女の血筋であることを聞き、「魔女修行」を行うことになる。魔女修行といえば魔法などのファンタジーなものを思い浮かべるが、この物語では「自分で考え、自分で決める」というシンプルで地味なことである。しかしこれは普段の生活のことだけでなく、喜びや希望、幸せも自分自身で決めるという実際は奥が深く難しい修行であった。おばあちゃんはまいとの生活のなかで、まいにいかにして自分らしく生きていくかを教えている。

主人公が田舎で過ごすことで心が癒され成長していくというよくあるストーリーであるが、この本は盛り上がる箇所が少なく、早く次が読みたくなるような展開は全くといっていいほどないので好みが分かれるかもしれない。しかし、この本の良いところはおばあちゃんの言葉にある。まいのように私達も辛いことがある中で生きている。まいがおばあちゃんに癒されていくように、この本の読者である私達自身も癒されるのだ。また、本に書かれた自然やおばあちゃんの家での素朴な暮らしが頭に浮かんでくるようで、読んでいて心地よい。早く続きが読みたくなる話ではないが、ゆっくり読める、日常に疲れた時に読みたくなるような本である。

タイトルの西の魔女とはおばあちゃんのことであるが、そのタイトルの通りおばあちゃんが死んでしまう、ということも大きく関わってくる。「まいと母親が倒れたおばあちゃんのもとへ向かう」というシーンから物語は始まり、この本の大部分である「おばあちゃんと過ごした二年前の夏の回想」をした後、ラストに「おばあちゃんの死」が書かれている。本書は「生きていくこと」をテーマにしたうえでその先にある「死」もテーマとなっている。

まいがおばあちゃんに人は死んだらどうなるのか、と問いかけるシーンがある。おばあちゃんは、魂と身体が離れ、魂はまた長い旅をするのだと答え、十分に生きることは死ぬための練習であり、身体を持つことは魂が成長をするビッグチャンスなのだという。生と

死、全く反対のようだが、一繋がりのもので書かれている。

おばあちゃんにたくさんの生きていくヒントを教わって、まいは少しずつ成長していく。しかし物語の終盤でまいはおばあちゃんとケンカをし、そのしこりがとれないままに両親のもとへ戻っていくことになってしまう。そのあと二年間、二人が会うことはなかった。

おばあちゃんの家で過ごした回想が終わった後、おばあちゃんの家を去ってから一度も会いに来ることが出来なかった二年間の後悔をしながら、まい達はおばあちゃんの家へと向かう。そこで待っていたのはおばあちゃんの死と、おばあちゃんからのメッセージだった。

先ほど盛り上がる箇所が少ないと書いたが、本書が一番盛り上がるのは本当に最後の数行である。私はこの終わり方が好きで、初めて読んだ時から忘れられないほど印象深かった。この最後のたった数行に、話の全てが向かっていたと感じられるのだ。「おばあちゃんの死」は私達が考えているような「死」のように重々しくなく、物語の流れを受けて清々しいほどに書かれていた。私自身、おばあちゃんが死んでしまったとは思えないほどすっきり読み終えることができた。また、ケンカしたまま死に別れてしまったというもどかしさも全て吹き飛ばしてしまうほど、まいとおばあちゃんの絆をも感じられる素晴らしいラストである。

本書は児童書として分類されているが、大人から子供まで楽しめる。ぜひ一度読んでほしい作品だ。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 森 哲郎

『西の魔女が死んだ』は、その表題からは予想できないような不思議に面白い作品だった。

作品を読んで再び評者の書評を読み直して、あらためて評者の読解の正確さや、物語の展開に即して大筋を述べる表現の自然さに感心した。そのみならずこの作品の読み方として、「本に書かれた自然やおばあちゃんの家での素朴な暮らしが頭に浮かんでくるように読んでいて心地よい。……ゆっくり読める、日常に疲れた時に読みたくなるような本である」という自分自身の日常に引きつけての「ゆっくり」の指摘も素晴らしい。

そして何よりも「おばあちゃんの死」をめぐるラストの約束、物語の頂点をなす出来事への、評者独自の深い理解に講評者は再び驚嘆した。我々の日常の何気ない生活のうちにも、何か「おばあちゃん」の魔法によって、評者の言う「清々しい」感じを発見できそうな気がしてきた。評者のていねいな読み方と的確な理解に選考委員の高い評価が寄せられた。

受賞者から一言



この度佳作に選んで頂いたこととても嬉しく思います。文章を書くのは苦手で、自分の作品が受賞できるとは思っておらず、受賞のお知らせを頂いたとき大変驚きました。これを機に、読書をもっと楽しんでいけるようになりたいと思います。ありがとうございました。

第5回書評大賞アンケートから

書評の応募と同時にアンケートにご回答いただきました。ご協力ありがとうございました。これから応募しようと考えている人も参考にしてください。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ・ 私の友人が昨年この「図書館書評大賞」に応募したことがきっかけです。友人が表彰されている姿を見て、来年は自分があの場に居たいと考えるようになりました。また卒業前に大学生活の集大成として何かを残したい、という気持ちで応募を決意しました。
- ・ 自分の文章がどれだけ評価されるのか試したかったから。
- ・ ずっと応募したいと思っていたのですが、ずっと勇気がでず、今回4回生でラスト・チャンスと思い応募しました。
- ・ 活字で自分の中にある思いを表現したいと思ったから。
- ・ 純粋にこの本をより多くの人に読んでもらいたいから。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- ①話題の本だから (6人)
 - 先生からの推薦・指示 (15人)
 - 図書館で見つけたから (8人)
- ④好きな作家だから (11人)
 - 興味のある分野だから (26人)
- ⑥その他 (6人)
 - (その他の内訳)
 - ・ 今までで最も心が揺れた本だったから
 - ・ タイトルが興味深い内容だったから
 - ・ もう一度読みたいと思えた本だから
 - ・ 世間で注目されている内容の本だったから



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(49人)(理由)

- ・ 文章を書く能力、さらに伝える能力が養われるから。
- ・ 1つの作品をただ読むだけでなく良さを人に伝えるためにその作品と真剣に深く向き合うことがとても楽しかったからです。
- ・ 今回のこの企画をきっかけに本を読む機会ができたから。
- ・ 最初はめんどくさいと思っていたが、本を読むこと、伝えることの楽しさを感じたから。
- ・ 今回自分が応募した書評よりレベルアップしたいものを書きたいから。
- ・ 大学時代に、いい本だと思える本をたくさん見つけたいから。

「いいえ。」(20人)(理由)

- ・ 是非応募したいという気持ちですが、来年卒業のため出来ないことが残念です。
- ・ 書評が思っていたより難しく、内容をどう伝えてよいかわからないため。
- ・ 小説を読むという行為が私は苦手であり、本を一冊読みきるのに苦勞した。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出時期、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

◆ 感想

- ・ とにかく文章構成が大変だった。小説の内容ばかりを書いても自分の意見がなければ書評ではないし、どちらも入れようとすると文字数がオーバーする。それとの戦いでした。
- ・ 感想文との違いに戸惑い、難しかった。
- ・ 読み手のことを考えて、文章を練ったり、言葉使いに気をつけることが意外に難しいと思いました。
- ・ 書評というものを初めて書いたので、書き方なども最初は分からないことが多く大変だったが、やってみてよかったと思う。
- ・ 書評は初めてだったので、最初はどういう風に行けばいいのかわからず悩んだが、書き進めて行くうちに伝えたいことが明確になってきて最後は楽しく書けました。
- ・ 人に書籍を紹介する文章を書くことが難しいことがわかりましたし、自分の文章能力の低さにも愕然としました。客観的に、これから読む人のための文章なので、本の内容をそのまま書いてはいけないということはわかっているのですが、できあがってみると、書評とはいえないものになってしまいました。しかし、これを機に、書評をするために本を深く読みこんでいくことや、その時に感じた感動を文として表す楽しさもわかったのでこれからも続けていきたいと感じました。

◆ 提出方法について

- ・ 提出方法が変わっており、もっと説明が欲しかった。図書館から直接のリンクがないのも不便であった(毎回 POST から接続)。
- ・ 提出方法への説明をもっとしてほしいです。
- ・ 提出方法が少し面倒でした。



◆ 文字数について

- ・ 書いていると 2,000 字がちょっと少ないような気がしました。

Q5) 6月に「書評大賞講演会」が開催されました。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- ・ 宮本輝さんと呼んでほしいです。
- ・ 私は今回書評をさせて頂いた著者、伊坂幸太郎さんの講演を是非お聞きしたいです。単純に伊坂幸太郎さんのお話をお聞きしたいことが一つと、また多く作品が映画化されているので、小説を読んでみようかな、と思っている学生の後押しとなるような講演内容を期待しています。
- ・ コラムニストの泉麻人さんの講演を聴きたいです。
- ・ 町田康先生に会いたいです
- ・ 講師の方の執筆された本を本学の生徒が何人か書評して、その感想や意見交換をできる講演会があればおもしろそうだな、と感じました。呼んでもらいたい講師の方は、今回の書評させて頂いた重松清さんと、個人的に会いたい方が豊島ミホさんです。
- ・ 原田宗典さんが来てくれるのならば、仕事なんて休んじゃう。
- ・ 山田詠美
- ・ また有名な作家と呼んでほしい。
- ・ 作家の森見登美彦さんにきてほしいです。
- ・ また、有名な作家と呼んで頂きたいです。今年の平野啓一郎先生のような、出版界の現状など小説以外の話をされる方を期待しております。

2次選考を通過した方々

今年度は応募作品のレベルが非常に拮抗しており、選考委員のなかには、以下の方々の応募作品を強く推す先生もおられました。健闘をたたえ、ここに発表いたします。

尾原	隆仁	(経済学部経済学科3年次生)
長岡	良	(経営学部経営学科2年次生)
野倉	健太郎	(経営学部経営学科2年次生)
塩見	綾	(経営学部経営学科2年次生)
田中	真理	(経営学部経営学科2年次生)
太田	真祐子	(経営学部経営学科2年次生)
田中	弥大	(経営学部経営学科3年次生)
馬場	雄也	(経営学部経営学科4年次生)
佐藤	未希	(文化学部国際文化学科2年次生)
山田	千晶	(文化学部国際文化学科2年次生)
村井	優斗	(文化学部国際文化学科2年次生)
川口	晴可	(文化学部国際文化学科2年次生)
小林	哲朗	(文化学部国際文化学科4年次生)
山口	充	(理学部物理科学科4年次生)

第5回京都産業大学図書館書評大賞 統計

1. 学部別応募者数

前回の応募者は173名でしたが、第5回は77名と応募者数が減少しました。その要因としては、ゼミの教員の推薦による応募者が減少したこと、提出方法がeメールからWebに変わりわかりづらかったことが、応募者アンケートからうかがえます。次回書評大賞実施に向け、応募者のご意見をもとに提出方法の改善を検討します。応募者の所属学部別では、経営学部がほぼ半減となりましたがトップを維持し、前回3位の文化学部は微減にとどまり2位となりました。前回2位の法学部は応募者数が大きく減じましたが1名応募でその1名が入賞、外国語学部も応募者2名で2名が入賞でした。

2. 学年別応募者数

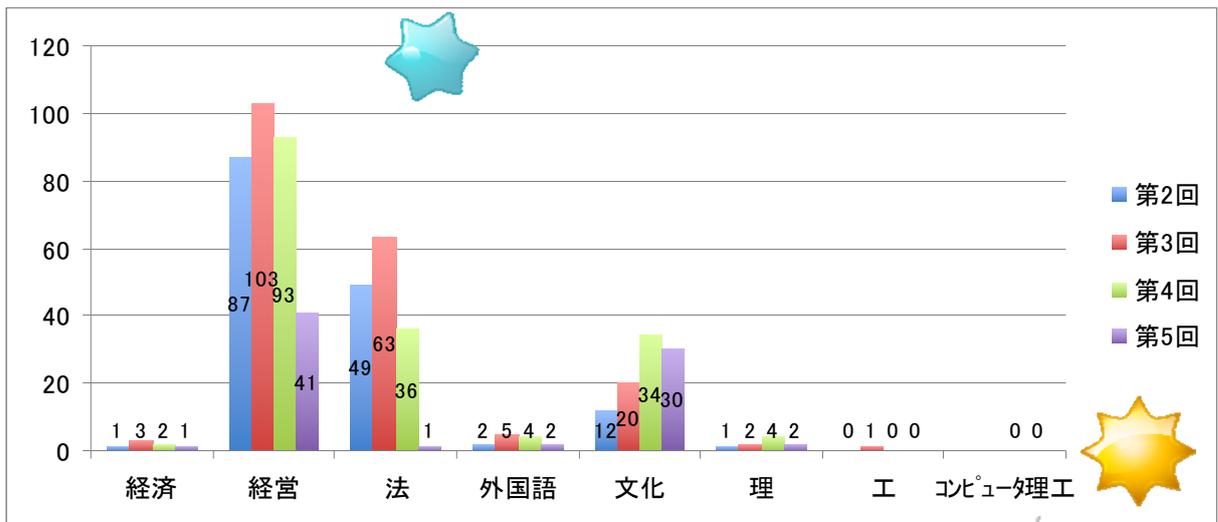
第5回の応募者学年別は2年次生57名、3年次生9名、4年次生8名、1年次生3名の順となりました。残念なことですが前回応募者数トップの3年次生が68名減となったことが応募者総数減少に大きく響きました。入賞者は1年次生2名、2年次生9名、3年次生2名、4年次生3名です。前回応募者がいなかった1年次生が3名挑戦し2名入賞されたという結果は、多くの方に入選のチャンスの可能性を示したのではないのでしょうか。次回に期待します。

3. 対象図書分野別冊数

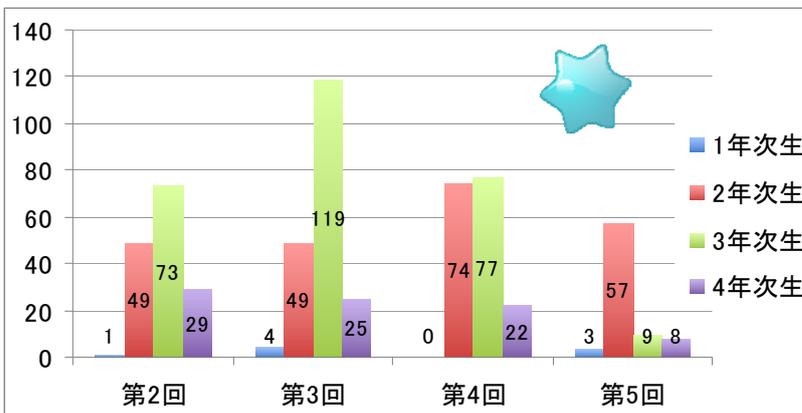
過去3回と同様に「文学」分野図書への書評が最も多く、次に多いのが「社会科学」分野となりました。全体に占める割合は「文学」が47%、「社会科学」が28%となっています。「産業」分野図書は今回6%ですが、年々減少傾向にあるのは気になるところです。

第5回では特定の著者や作品への過度の集中があまり見られませんでした。

1. 学部別応募者数

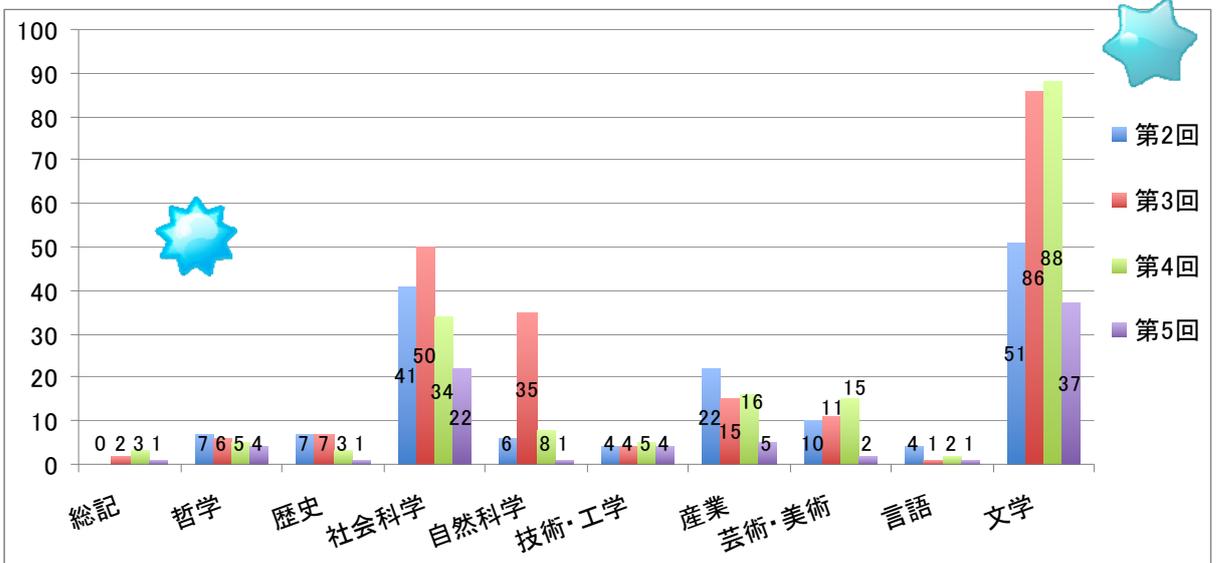


2. 学年別応募者数



※ 1・2 の応募者数は複数篇応募の場合、1名としてカウント

3. 対象図書の分野別冊数



※各統計は4年間分を掲載

京都産業大学図書館書評大賞 概要

応募要領（抜粋）

1. 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

2. 応募資格 京都産業大学の学部学生。

3. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字～2,000 字以内。ワープロ原稿に限る。マイクロソフト社の Word を使用すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。インターネット等からの盗用・剽窃は厳禁。
- (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし受賞は 1 人 1 篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募総数

77名 78篇

実施日程

応募期間 平成 21 年 6 月 1 日（月）～ 9 月 30 日（水）24 時

入選発表 平成 21 年 11 月 30 日（月）

表彰式 平成 21 年 12 月 16 日（水）



選考委員より 一言

書評は内容の説明や感想だけでなく、批評を中心に書く。全体として、筆者の意見や考えは少なかった。批評はよい点とともに、少しは悪い点、疑問点にも触れる。これによって、筆者自身を表すことになる。（勝矢先生）

書評には、賞賛と批判の精神があってしかるべきだ。とは言うものの、頼まれ原稿でもなければ、気に食わぬ本の批評は書かないものだ。果して、手にした書評は感心、感動で満ち溢れていたが、少々物足りない。辛さの隠し味は甘みを引き立てる。諸君の批判精神を期待したい。（黒坂先生）

「書評」という作業は、自分が読んだ作品の面白さを自分だけのものに独占するのではなくて、ほかの誰かに伝えることであろうが、その作品の核心に言及してはいけないという不思議な自己矛盾があって、面白いと思った。（森先生）

書評大賞の目的に鑑みれば、理屈っぽく難解な書評よりも、素のあなたが滲み出ている親しみやすい書評の方が良いよなあと感じました。巻末に「解説」がない図書を優先すれば、素が出やすいような気がします。（中井先生）

単なる要約は、全く評価しなかった。書評は作品との格闘で、書いている自分が出てくるはずだ。巻では書評ではない宣伝文が出回っている。毒されないように。（渡邊先生）

この書評大賞に応募できるのは、京都産業大学生のいま 4 年間だけです。書評の構成を練り、書き上げ、推敲し完成させるまでの過程はとても大変かも知れませんが、でもその経験はあとで、きっとよかったと思えるものになるのではないのでしょうか。（池田）

最近、「向き合う」という言葉をよく目にする。「ジョイスと向き合った 70 年」（日経新聞）や「楽譜と正面から向き合えよ」（『のだめカンタービレ』8 巻）などだ。1 冊の本と正面から向き合って、読みとった発見を書評に書いてみよう。（近江）

よい作品が多く、選考には苦勞しました。ただ、タイトルにもっと気を配ってほしいと思います。タイトルは、何を伝えたいのかを凝縮して表現するもので、読む際にも一番最初に目に入ってきます。読み手に強い印象を与えるようなタイトルを付けた作品を期待します。（天笠）

入賞作品をみると、年々文章や構成の質が上がっていると感ずります。本から発せられるメッセージを書評の読み手に伝えることは簡単ではありませんが、来年もメッセージが増えることを期待します。（中上）

応募作品を読みながら、自分らしく生きることについて思い返したり、人生の意味を再考したり、関わり合いが薄くなってきた社会を思い起こしたり、推理したり、青春時代を思い出したり、頭の中を色々なトピックが忙しく行き交いました。夏期授業で課題の 1 キロ泳を思い出しました。（真部）